

新編江戸志

内務省圖書
 第一〇九〇三號
 和書部地理類
 共十冊

和書門
 二二六八三
 一八九三
 一〇九三
 冊架函號類

35
 内閣文庫
 和
 三二六八三
 一〇九三
 冊架函號類

内閣文庫	
番號	和 22683
冊數	10 (1)
函號	174 35

共十

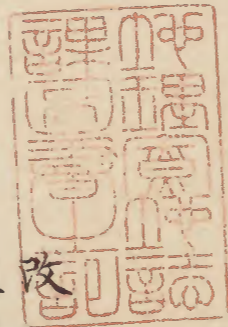




五
行
始
江
戶
志
九
列

心
口
長
四
百
餘
年
其
間
其
事
始
末
詳
載
於
此
書
中
其
書
之
名
曰
江
戶
志
九
列
其
書
之
體
裁
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
筆
墨
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
字
體
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
紙
張
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
裝
訂
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
價
值
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
名
聲
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
功
用
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
影
響
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
地
位
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
尊
嚴
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
光
榮
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
輝
煌
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
燦
爛
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
絢
爛
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
奪
目
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
驚
心
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
動
魄
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
感
人
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
動
人
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
驚
天
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
動
地
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
感
天
亦
與
尋
常
不
同
其
書
之
動
地
亦
與
尋
常
不
同

11
11
11
11
11
11
11
11
11
11



正改
新編江戸志凡例



一 凡分東西者以江城為中央東漸于葛飾南被于六御西訖于武藏野府中北限于豐嶋川口村

佛寺神社如盪觴者一摠於其舊記雜錄也或社家者流及佛寺僧院傳說記焉地名考證者雖鄙夫野人之語載之至如漏其說者猶待博覽後哲之辨

至所引用之書者不論泚會臆說讓之其書而已

一可^レ爲^ニ其^レ摭^ニ者^ニ雖^レ野史小説^ト暫^ラ茲^ニ舉^ニ其^レ說^ヲ
 一雖^レ府外近郷^ト所^レ知^ル於^ニ世^ニ古跡者^ヲ摘^テ僅^ニ載^ス
 之爾



[Faint handwritten text, mostly illegible]

大意



凡^レ江府乃名勝を記せる書は魚く五六部ある
 一^レ江戸の記しや天和の比俣逸老
 人^ノ著書にして是と始とて魚子や元禄の
 梓^ノありやせ^レ江戸名取淡江戸雀はいて
 江戸鹿子ややあ^ラう^ラう^ラ小記せるものあり
 皆里淡小近^ノ一^レや^レり^レ魚^ノ一^レ江戸神社畧記も
 廣^クと^ク江戸砂子の^ニ世^ニに^テや^セ

是も漢書の多かるる一それや中世も後世も
先ひとせざるも名のみなき花小志の如様と
名付ひしを名後の古跡に門人の答句
そのせを所へたるひきまる古書と引るくその不
神社畧記の如き此の如く本江戸談神社考
乃類々の説をいけるうう新編小尋ね出せる
しし書まきしししてその書の名とのせをこれ
に引る書目とハハの述り引出のや小出せるも多

一こまきと世一編と東武の名跡小一拾ひぬらう
とくふ魚一其後板々出せる名跡志も江戸砂
子と抜粹一編のや二二の國の補心と書て志
うと江戸砂子とてしとあるうその書と謂はし
て或書或説と出て難すその名をさしし識
るを以て罪ゆる事にはや今や此の編を南向
茶話求涼雜記の説とてしとある寺社とてつ保
里談にしり又々舊書めとて先く功と終る

之の南向茶話、江戸妙子の脱漏、或増し、永涼雜
 記、又南向茶話、小と多と説を補ゆ、是亦之参考
 一と、まの、一部を述ゆ、まの、と遺漏、まの、亦多
 かる、魚、一、ま、一、地、と、ま、一、材、乃、ま、一、一、増、兼
 の、舟、の、ゆ、一、ま、一、所、一、ま、と、後、の、人、改、め、補、む、ま、
 一、ま、一、甚、の、大、幸、ら、る、一、り、一、

引用之書目

- | | | | |
|-------|--------------|------|------|
| 舊事紀 | 上宮太子
驛子 | 日本書紀 | 舍人親正 |
| 續日本紀 | 菅野真道 | 日本後紀 | 春澄善繩 |
| 三代實錄 | 三善清行 | 文德實錄 | 昭宣公 |
| 類聚國史 | 管家 | 神名帳 | |
| 扶桑畧記 | 皇月 | 公卿神任 | |
| 一宮記 | 建保比
荒木田氏良 | 諸神記 | |
| 武藏風土記 | | 元亨釋書 | 虎閑 |
| 和名類聚鈔 | 源順 | 万葉集 | |
| 伊勢物語 | | 八雲御鈔 | 順德帝 |

井蛙抄 清輔 更級日記 菅原孝標女

名所方角鈔 宗祇 暮京集 太田道灌

名所類字和哥 細川玄吉 万葉代匠記 叙柴沖

勢語億談 柴沖 勝地吐懷編 柴沖

東鑑 源平盛衰記

參考太平記 鎌倉大草子

關東治乱記 北條五代記

北條盛衰記 豫章記

武德編年集成 家忠日記

關難問記 本朝通記

將軍家譜 本朝三國志

婦女傳系 諸家續胤 白童子

諸家醫傳 武家名數

諸家系圖 猿樂傳來記

寬永記 和漢三才圖會 良安

高野事畧 白石 了譽六行業記

北國紀行 堯惠 文明比 丙辰紀行 道春 元加比

遠遊紀行 山崎垂加 鎌倉紀行 戸田氏

木曾路紀 貝原氏 驛路鈴

東海道記 松井喜春 神社考 道春

神社啓蒙 白井宗因 諸社一覽

神社畧記 荒井敦春 享保三年 紫一本

武藏野路草

淡源
元禄比

江戸雀

名所談

元禄七年

江戸砂子

治涼
享保十七

江戸鹿子

松月堂不角
元禄二年

江戸名勝志

南陽子
享保十八

武藏野地名考

甲次義章
享保比

地名箋

南向茶話

酒井忠昌

求涼雜記

高田雲雀

舊事茗話

落穂集

大道寺老人

江戸繪圖

寛文天和寛永
元禄

新著聞集

著實異事

柳子

耳底記

光唐郷の耳底記
非久述世の俗書

詩家地名考

新見隨筆

正朝入道
享保之比

温故隨筆

竹叢平高尚

宗祇廻國記

文明十八

國名風土記

國花万葉記

珍書考

鶴銅信真
元禄比

江家次第

大江匡房

可成談

徂來先生

拳白集

木下長俊

風土記殘編辨

平祖衛
正徳比

都之津登

叔宗久
觀應比

政談

徂來先生

兵家茶記

日長繁高

秋祿覺

長伯

東武編年祿

道春

大系圖

公定朝臣

諸社諸寺録起

同舊記

政事要畧

惟宗允亮

鎌倉志

水戸

犬追物記

林春齋
正保比

神明憑談

多田義俊

關東古戦祿

榎島氏

雜話筆記

白竜子

螢雪新話

紀音子

萬紫考

加茂真淵

寺社拾遺

吾妻日記

事のたひび

傳來記

親世大夫の
衣の事記

身延紀行

源州元政

鎌倉九代記

事跡合考

せめてハ州

竹齋物談

大東詩名地名考

江戸志撰者之譜

東武懷山子輯著

近友又三郎藤原義信之明和

元年閏十一月十六日為 小普

安永四年正月廿二日死時年

五十有六歳

改正新編江戸志卷之一

一 御曲輪内

東西南北

江戸橋筋東北 同東南

一 城東

日本橋邊
日本橋南筋

京橋南筋

一 城南

櫻田邊
永田馬場邊

霞関邊

一 城西

糎町

番町邊

一 城北

飯田町邊

小川町邊

一 城良

駿河町邊
駿河臺邊

神田邊

塵積校正

飯田町小位町人

山田屋半右衛門一巻カ

シヨトリ

母六ツのたれをゆふむきーとくふ成魚し今童
児のきくわきふ十六むきーとくふも道きゆくの
ちちらうりや又加茂真淵り流ふむきーとくふ
はむきーとの畧訓あり古流ふむきや八人の葉る
所よりふ当ふとてくふ人多くはくふふまき
たれを方向葉の人と多くおある。こころ葉部と
いふ道にゆふむきの岩を葉葉もむきーといふ
所よりたれを人多くむきおある。くふとの和
くふ上の國をむきくみゆりふ是今のさうみ

の國ゆき後りむの字成上畧せーありその
下のゆむきーとくふいふ是るその字と下畧
しむきーとくふあり亦國を上下とくふ
の例と西國と前後とくふあり。筑前筑後
肥前肥後と前々後あり中國小國ハ前中後
と國と二ツよきけらる。彼前彼中彼後越前越中
越後等あり東國を上下と成上流下流上野下野
ありこれむき上むき下や二ツよきけらきーいふ
とくふんゆきけら

舊事記曰无邪志國造志賀高元德朝世出雲臣祖名
 二井之宇迦諸忍之神狹命十世孫兄多毛比命定賜國造
 日本書紀曰廣國押武金日天皇元年十二月武藏國造笠原
 直使主與同族小杵相爭國造經年難決
 續日本紀曰日本根子高瑞淨足天皇養老三年七月庚子
 武藏國守正西位下多治比真人縣守管相模上野下野
 三國

和名類聚鈔曰武藏國

國府在多麻郡
行程上克日下音

管二十一

今按武藏小二十二郡あり和名鈔史葛飾郡

一の國の形を入らして二郡と次又國号と
 二字に定めて武藏と書事と於國郡郷
 村等用二字用好字元明天皇和銅六年
 被作諸國風土記附の事也と旧記に兄中志
 多子今傳ふる不乃武藏風土記と之るを
 偽書めしむる一の風土記中を以て
 委く々平祖衡の風土記後編辨中中
 考少多しとせしむる偽書といへり

女子の事ゆへに當國の夏河をの田
記ゆへて書とのゆへに又於魚も
ゆへに申し小は書をも風土記の流を多く
るゆへに信用しつ流とせしは
ゆへに人ゆへにゆへに

○江戸 或ハ往土 豊嶋郡峽田領 風土記曰 公穀五百九十二束三斗田 假粟三百七十九斗田

貢馬牛濱秋河無見與呂伊等一充左馬寮與武庫司

南向茶話云江戸の号を江戸望める意成庵一抄
當御城天正年中御入國以前今乃船子橋乃印
ア小の方大沼ゆへ西乃方との木坂下ゆへ入江
ゆへに小川町も寛永年中介涉曲輪を
ゆへに牛込ゆへの流船河系橋の向へ並
ゆへの木坂の方へ流まゆへ又小石川の流を今
ゆへの涉福荷の道ゆへ一ツ橋の橋の川へ流
ゆへの是ゆへに江戸の号を望むと云
按るゆへに江戸の号を往古も有て舊記

增紅樓鶴如立^千如飛以翼然^{タリ}乎其中東武之一都會有揚一益二之亞稱也東望則平川縹緲兮長堤緩廻水石瑰偉兮佳氣鬱蔚芬謂之淺草濱^ト白花大土遊化之場臣殿寶坊輪奐以掩映乎數千里瀛補浴妙境神人所知云其後則滄列茫乎百川與海會吳楚東南坼乾坤日夜浮即此乎其前則谷岩出沒而原野芬蒼天斬正之幾多仅一夫當關則百萬不可以近世乃知此地面勢實一方金湯之最而無所與二也下畧

家忠日記曰天正十八年庚寅八月大朔日武列江戸城^ニ移リ給フ是ヲ俗ニ関東御入國ト云江戸城ハ遠山丸衛門佐景政カ居城也景政者北條ニ屬メ小田原城ニアリ其弟川村兵部太輔ヲメ江戸城ヲ守シム遠山丹波守^{景政}真田隱岐守ト二人志ヲ御當家ニ通シ江戸城^ニ移リ給フ案内者トシテ台旆ニ先立テ江戸城ニ來リ川村兵部太輔及ヒ景政カ從卒ヲ江戸城ヨリ出シテ渡御ヲナシ奉ル此功ニ依テ遠山丹波守真田隱岐守ニ各五千石ヲ加賜フト云

按是るも江戸湯城乃度實錄倉九代記
本朝通記山鹿折本せり外諸書に
之もは案の一本を江戸右派と記す
書の中ゆゑの古書中へ志しゆくのみ
をゆくも是より湯城沖入國海へ伐
の傳記諸派より之も思存く本文
其書の江戸記を文明八年丙申八月
湘山暮撫得の傳よりて吉田道藩へ
を下記中へ畧して是と出するは
鎌倉

大草紙も長祿元年四月太田左衛門守
武列江戸城と記す

●櫻濠子補湯本丸湯殿天正十八年庚寅八月朔日
御打入之時建せり少干時寛永十六乙卯年八月
三日前櫻葉中を土日とて湯屋取より出火湯殿
悉焼失然も湯天守御多門木列東に
此日大雨あり少於て再い湯屋管ありて
明暦三乙酉年正月十九日の火災も湯殿湯天守湯榎
まで悉焼失せり依て湯屋記も今に
存

御曲輪内東

○大手

○大下馬

○和田倉涉門

龍乃石

○馬場先涉門

此系の一本云むりしと不明涉門といふ今ハ姓未
自中りしとる場先涉門といふし一記ス涉門内
ノ馬場りしと名と云

○八代曾河存

和田倉より馬場先の山場と云

落穂集ノ涉入國の時分まてハけ不獵師町

ハ一と記テ紫の一本云むりしヤヨウス

リノ異國人ノハけ不ゆく屋敷と綿りしりの
名也

慶長記ノ一ノ慶長十九甲寅年九月朔日阿茶
陀人素与郎揚子虎の子二足と献する也

江戸方角安見之園にノ一長保年中
大田道灌南城をまけきあふ付孫子想
ノ者ノ作テ城外ノ町割とあるし
刻ノ廟と描きしむる如く町割とある未
廣警昌と云き先兆之波流ふ云云

多岐と今中流ありと云々はけ説
信用ありす耶揚子（屋敷）と云々はけ説
前やうに云々の号古書に足りては
耶揚子（屋敷）と云々の号古書に足りては
年十月の事ありと武徳編年集
も書に耶揚子の吉利支丹御制禁乃
時回忌と云々の号古書に足りては
以て按るに江戸方角安尼の説妄談あり
屋

○大名小路

やうすうーの後さふ

○龍乃口

地名考曰湯城は水の川也南郭詩龍口溝横
紫陌流と云江戸砂子云むりる平田村と云
里ありけ処に平田大明神と云むりる村の法
さるるりー近年稲荷の社と崇めらるる
とあり

○道三河岸

流の口湯城の川きー在る道三の屋敷あり

慶長の比を柳町と云傾城町へ天正年中系

都万里小浜柳のこ場子系三瓦面と云者傾城
町をいれ立柳丁と名付けられたるの京師の松女
町の名をとりて柳丁と名付る也なり

○道三橋

今大路家の宅地の前小浜に名付く

諸家醫傳云元祖道三号一溪洛陽人永正四年
九月十日生于京師柳原其子玄朔延壽院道三
法眼天正十六年大閤賜於城列五百石寛永五年
十二月十日於江戸死八十三とありあの道三或時由め
しりし付少いそりちれははとめりし

小浜城をまきりし由と申上りまきれは別橋と
うきまきりし

貞康松より此道三橋と延宝八年表紙金市市
之橋開板の江戸安尼之圖ハ彦次郎橋と書り亦
寛文十年遠近及下り圖にも因縁

○錢糴橋

常盤橋と云々橋のる云

江戸砂子云むり橋をけりしめの付後に入らぬ
毒とあり出りし名と云
上吉は西村丁と大木の
折二がりのと云
貞雄云江戸砂子一洗むりし橋の思

永樂後乃引磐石して後磐石と云ふ事
と云 予嘗て一と云 後と高小者は石に集り
居たりし石名とすと云り 予嘗て後買橋
明曆の江に後う心橋と云一と云 明曆
年中中川森雲と云一 宗通の句に後買橋
と玉曼りけと云句なり 夜後と女と田曲輪
出はるは河邊の津門も切をかくてを
出さる
此の如きけし一の下を船をて出せし切を
て出せし切をて出せし切を

と云一と云 分明なり

○常盤橋

本所へ出る所なり一ハ大橋と云一寛永の江戸
事なり

江戸砂子云常盤の松の塚と云 松平の山と云
と云 河に名付らま一と云 橋に或人のいそいで
非る 北條女代記に常盤と云一上中へ勝負と云
河邊を涉入國の前北條持城の石なりと云 尚もつ橋
あり

貞祐のいそいで 此の書付きとも云うなり 北條女
代記は文治二年九月彼の仕合大橋乃上

○ 吳服橋

河内出石川より寛永に於て是後橋と

地名考曰但来の詩憶得兵門樂と出づ

○ 鍛冶橋

多丁ノリノ橋ノ名ナリ

同南

○ 枯梗御門

大手ノ南

或説より寛永の治 御上洛の付 湯治城の祝儀と表
すは枯梗湯つと建らばし由

貞治より小野の尚末の江戸古橋名はけ

湯つと吉慶のつと記一 東之

○ 坂下湯つ

枯梗湯つの南 江戸古橋名を坂下湯つと書く

○ 櫻田湯つ

落穂集湯入國の節を介 櫻田湯つの如きは 大なる
扉の亦戸 門より名を小田系門といふ
と記す或説より櫻田をむりの村の名なり
竹跡物語より

くまのんは花乃 桜ゆ 櫻田を苗代あり
香ふくをるらん

○梅林坂

同前

文明年中右田乃麓川越三芳野天井宮といふ
に川邊道並木は梅樹と梅らしきしよる梅林坂と
いふしと江戸砂子に出次

○松系小治

竹橋の内

紫の一本は云むういふ本をいふ松系なるよの本と
伐り諸博黄門らの清和秋とす是を本を乃の屋
敷といふしと江戸砂子にもくく

○平河口涉り

紫の一本は云むういふ本をいふ松系なるよの本と
寺なるいふしと江戸砂子にもくく平河山といふよ

○竹橋

旧変若活云漸入國の比竹とらそは流されし
しりの谷ありと紫の一本は云むういふ本をいふ

○北反橋

竹橋の内

○湯鷹鳥於屋

同前

○紀伊國坂

竹橋の涉り上り小坂

むう〜 けり子尾紀の浄教のり〜 是亦小各付

○代官町 田安浄門の内

貞雄のり〜 け代官町小坂(山)のり〜 天和四年

甲子二月十日代官町山麓母屋左原古山浄

左浄門に浄普法を以て浄付出来付同年

十月五日右に浄〜 浄慶災記下は浄日記小

又〜 あり

○馬場 田安

貞雄のり〜 於浄人未於〜 浄曲る 上覽る

る甲〜 於浄る場と云

○田安浄門 以浄浄場半の側と云有

紫の〜 一布〜 云む〜 代官町浄門の事〜 浄門の

浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜

浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜

浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜

浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜

浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜 浄の〜

貞雄のり〜 古(田安浄門)の辺と田安の浄と云

とて扇をうとつて

○橋 横屋子の補竹橋の方より去り付る扇の橋筋の方より
不幅を余程の丈にうき石橋なり記の園橋と云ふ

○維子橋

一橋乃西

あつたさきのむらさき昔唐人系府の長田池を
に下りて維子橋と云ふ入道一不に維
子橋といふ

貞雄云は事江戸砂子もえ下りこれも寛
永年中の江戸古橋系ゆゑ今の維子橋と

一ツを——と書ふなり

○一ツ橋

神田橋の西

此系乃一本に清入國の時分ハ大きなる丸木乃
一ツ橋をうけしよりその名をうけし寛永の古
繪系といは橋を維子と書す或は誤小云むし
松平伊豆守殿面交は前より一ツ橋を伊豆橋と
いふなり天和江戸繪圖にも一ツ橋といふ
入國より名ありん中古今もいふなき
とあり

予は書と編せし時、草稿のまゝとて或人よ
見えし、予の図とて、其事々とも、教へ書
く、送し、書し、書し、書に、其の流を、り、或説
に、云と、書し、と、多々、ハ、其人の、流を、り、其るに
、其の、一、つ、と、伊豆橋と、いふ、説、天和、即
、戸、果、小、い、と、いふ、説、あり、り、いふ、一、寛文
、の、即、戸、果、小、一、つ、橋、と、い、り、其の、事、のみ、に、り、り
、其、其、系、の、一、本、と、寛文、の、此、書、の、書、を、れ、夫
、り、も、一、つ、橋、と、い、り、其、る、昔、より、一、つ、と、い、り、

事、ゆ、り、り、と、さ、ま、さ、り、後、人、を、と、さ、り、り、り、
、卒、ぬ、り、り、
、貞、雄、云、い、り、り、り、一、つ、橋、と、云、り、り、り、
、一、一、延、宝、八、年、の、即、戸、果、と、一、つ、橋、と、此、因
、と、り、り、り、今、の、一、つ、橋、君、の、沙、弥、松、平、伊、豆、橋
、尾、交、り、り、因、り、一、つ、橋、と、い、り、り、
、其、云、り、り、り、一、つ、橋、と、い、り、り、
、の、即、戸、果、と、一、つ、橋、と、い、り、り、

○神田橋 一ツ橋の事

心よの丁上まき町廣小路南まき町大工町派
治町五市橋町北まんや町うち橋

以川筋内曲輪橋の河原通より一石橋日本
橋よみの次を江戸橋よりよみの川下を渡のり
よそと通より渡をり豊海をり

○日本橋 長九二十八間

源系元政の舟延日記に江戸へ到りての清く日本橋
思ふ本橋より大東詩家地名考にも南郭の詩に日
本より東日本橋と記するは元政の詩を祖衣して

あり凡て橋を江戸府の中央より諸方への道程を
定む室丁一丁目以西側を尾庄と云尾橋屋又
左橋の洋領の地よりむらハ尾庄と云く
西側を品川丁駿河丁本丁二丁目日本石丁三丁目
銀丁二丁目と通より神田橋より東側ハ本船町
安針丁小田原丁瀬戸物丁浮世小路本町三丁
日本石丁三丁目銀丁三丁目也

○室町 寛公賣六丁六每小田原丁瀬戸物丁の辻を高木橋より地代を

尾橋 築多云今日本橋尾庄と云辺の茨原の中に

地多き一町あり、澤左湯つと一様多段の家並とを
二ッ抱へるもの大木をとり、隙多生茂り一搦の様
多村ありと、渉入國の後、是今の新多越と云ふ
川移し、昔より一と記す

○十間店

本町石町のり、とり、毎年をまら羽子板船の
り、とり、とり、の市、とり、燈籠の、り、

○白旗稲荷社 浪下下日 別當大壽院 三宝流流

と、とり、石町一丁目銀下の邊、洗古と、福田村と云

里の、とり、その町の、移書、の社、とり、和洞四年
、とり、鎮、一、度、と、云、

○安針町

求涼雜記、り、云、安針と、とり、西洋の者、ゆ、元和
年中、ヤヨウスと、とり、者、と、同船、ゆ、来、於、一、後
日本に、り、あり、三浦安針と、名、を、改、め、別、當、町、と
賜、り、云、安針、丁、と、云、往、古、増、上、ち、け、思、ふ、所、し、と、云、

○時の滝

石町三丁目北側新道小町
江戸砂子と云、此滝を、涉、城、内、と、り、と、云、数、段、

乃曰漏少く流の夢悪く一年の近年推
名伊藤は我流並せを黄涉潤を長久乃
言と云

○按るるに或人の云此流非也曰漏の家子媿
○未だもふ流を用ひて撞橋由未あまは新
○未だに鐘と車少く引来り懐く流と引
○車少く又多流と引引之悔ふ是を
○人引少く流種集りおし
○流城内少く附の流と撞きく連くは太鼓

○少段めふ流と引引くは為りも
○石町へ撞橋と引く新く流と流とせ
○つをむひ流城内の流と引引くは
○らむと引くは或老人の引くは右の山城
○肉に引る流をむひ引引くは内流流と
○流入國後流城内に引引くは
○貞雄云流城内の引引くは今ハ西九流太鼓撞
○の例少く引くは志ありあま中少く引
○と去心引くは引引くは又引引くは石丁の

滝をりしす滝を建し滝子変たり今
の滝田流の後室永八年小滝並されし
鐘之と決人りししきりせりしに彼
の滝小銘左の如し一寶永辛卯四月中院
鑄物御大工椎名伊豫後原重休といひし
と多子室永七年十二月十九日誓願寺前
柳町其田伊豆中庭交りし出火十石
町並焼亡の節此滝焼ゆりし石燈室
永八年湊並しと見申

○狭炮町

尚町の谷主^{アガリ}聯宗八布と云はれ其の狭炮工あり
神祖の名付りし名ありしけりしと云ふ代田村
と云ふ一湯狭炮張の伝を承りし町の名と云

横濱子補具小小信馬町八首の代田村と云ふ本村と云ふ
そ性古々更列湯屋の澤家之尚町と云ふ名は藤氏と稱するが代
田若狭吉の長子也又此席正友未あり代田指宿と云ふ村有
右若狭吉の村を殺して其地を以て一寺を湯屋の湯宿社と云
一先倉と云ふ代田指宿と云ふ其後の社地と云ふ一社
後ひく代田指宿と云

○小信馬町

往古の史を六本本也云る鏡の篇といは傳之

○因獄

小傳馬下

江戸砂子云涉入國の初は道小大板四五棟ありとの
此乃後者を捕へしめ本の下小おろし石出常力や
いふ後傳の士一紙帯さきまきしとの山役哉
となるより

梅屋小石出氏を平性めとし子葉乃後

胤元祖石出日向とて言る谷の家の一

満家系圖小見白千葉の流を今以九曜乃

星を附未きり

○薬師堂前

小傳上町

むし 浅茶东光院けり本寺茶師に依て在り

○千代田稲荷社

小傳上町 別当教光院 三空院流

○諏訪明神社

江戸砂子云むし 忍々星の禁にけり後小官部氏
の地小勧誘するより或人云世流振る千代田稲荷を
元の社地ハ今の常盤橋の内北奉納屋敷の向去小
りりとの思をむし 千代田村より今小傳馬町

ハミの地少く稲荷も別々勧法寺一之寺大徳
寺下の谷を走る地勘ヶ由ヶ家の日記に有りと言ふ

○橋本丁

此道天和の法中寺と古地之駒込願寺と深川法禪
寺本誓寺と深川雲光院と取願寺ホミの地有り

○馬場

馬場ハミ谷丁ハの表也

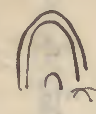
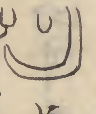
其茶乃一と中野云ハ一町の谷と云ふ本深川橋留田半七
と云別法精房と云ふむり一園ヶ京法深川の付
有る地也一町の下一と云の後朝鮮人の有るも後

こける場を指へ一今ハミ事あり

貞雄云ける場を指す一有る地と云ふ子細ハ古

子の築方ハ京の通り中の古を指して京

有り因て追出^{出谷}と云ふ是江戸古蹟也

又ハミ^{出谷}  ^{出谷}  是も明曆火災

乃後と云ふ地一と云ふ小なり ^{出谷} あり

惣して戦國の時地追出^{出谷}小築事一あり

り一此所の隈橋大将見り一町小中の古を指

了京也と云ふ大将押し法事と云ふ事あり

○門跡の井

横山町三丁目南側丁家の裏にある

むかしは不承の本願寺門跡の井あり其
後築地に移さるなり

貞雄云西本願寺濱町より木挽町の築地小
移さるなりと明暦三年酉正月十日焼失して
築地へ川筋あり 浄日記中明暦三年丁酉
五月三日今近の古化浄用地小石と云はる代地木
挽町に築地小於く百名四方の地はわらふと云はる今
の西門跡の地なり

○矢の浄庫跡

矢の浄庫を天和の江戸系にも是なり今の山伏井
戸乃辺々最澤町の小川と隈と々々北々支圃の
廣小路元柳橋辺横山町同朋町まで一系の石巻
之を疎の比を石巻を引て同社家石巻と成り
あり今も支圃橋より新大橋までの河岸と同社河
岸と云ふと云ふも皆うて四五家の石巻と云ふなり

貞雄云矢の石巻ハ今田沼家の石巻より小
の乃之同社河岸と云ふと云ふは南側を今

板倉家河田家の屋敷の河原と云ふは
橋より新大橋迄の河原をいふは河原次

○菜研堀 夫の河原の堀入堀の流之明王院と云庵不動有

○冠波橋 米沢町三自又菜研堀大川々入とて同名の橋あり

○丈婦柙 冠波橋の字にあり

○山伏井戸 石垣下

往來の舟の中にあり中流あり一りあると山伏の
いのりあるよりともゆめいとも名多と成り

○浅草橋 神田川よりなる此所の川に浅草足舟といふ

○柳橋 浅草橋の下大川へ出た

地名箋に揚柳橋と出は是を新柳橋と舊柳橋と云
ハ菜研堀乃下にありけり中をむり一は一船あり
あり天和江戸系をけは植木ありといふ

○西園橋 長九字五間

寛文江戸系に大橋といふ万治二年小よりあり
くるあみ川と武彦下流の隈といふにありけり
り大東詩家地名考祖來詩兩國橋邊動權歌
といふ

○新大橋

九百回余

西園橋の川下

元禄六年初てくる東野中川記大橋と出永代
あふけ橋と成合せく三橋と云と云り

○三流

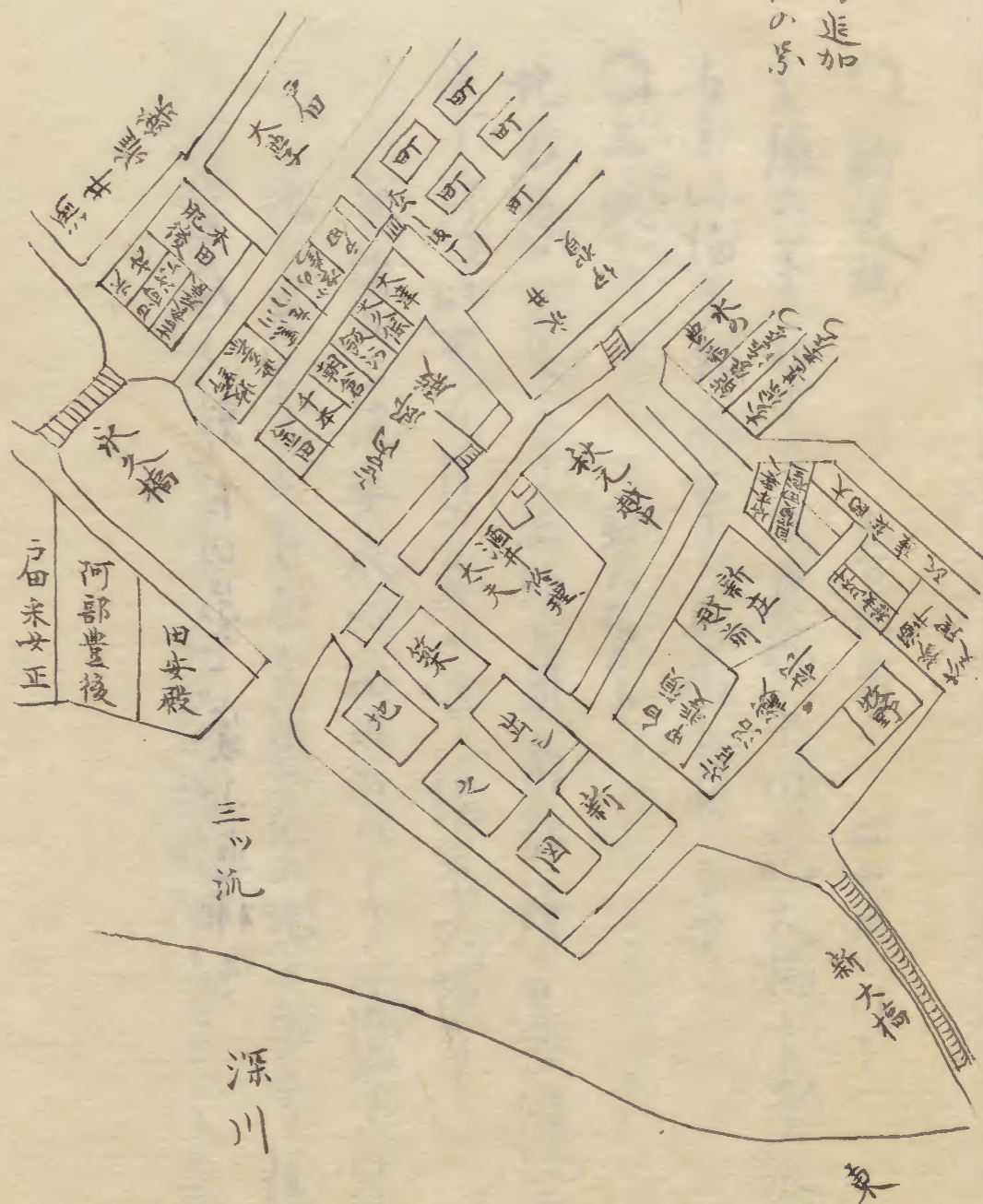
新大橋の下

地名考 三父三了三流 庄用南郭詩 日落漲流三流
連と河うけ不右月の名而そ 縁京の地あり

負雄云三流安永の初のあらより 出所の新
地とあり 今と茶屋多 整苑の地とあり 後世
小なるといふ所の三流の地形とある人も希

小なると新古の景と 爰小進補そ

志寄進加
三ツ流の系



明和八年 辛卯
六月十六日 傷示 杭

大橋三股 筑木立地

明和八年卯年六月十六日

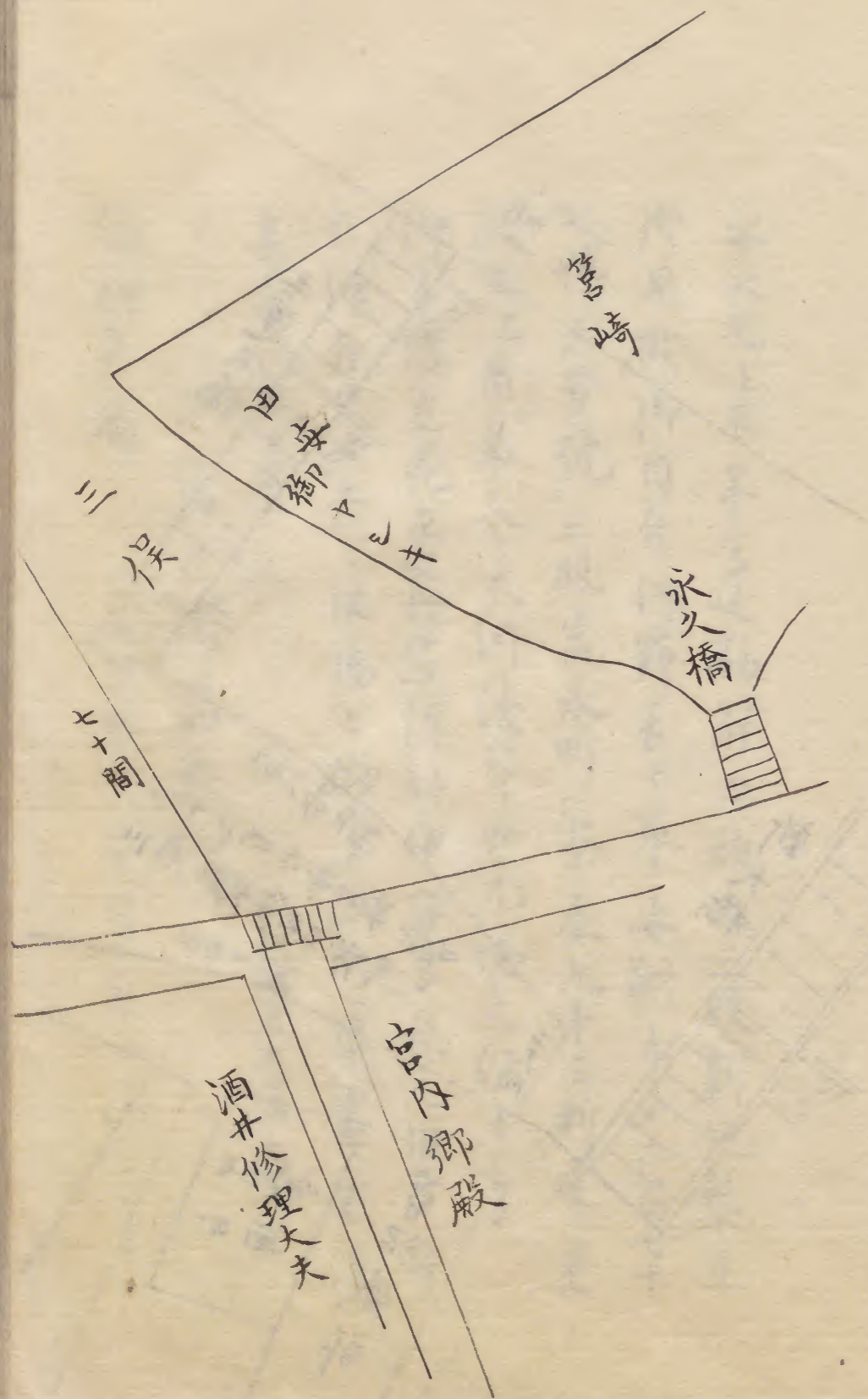
浄水並前乃古と後々
あまをいぬきく谷つけ
三又長水町とよ
安永六年丁酉の友のたを膠田
七

西ノ町

九千六百
七十七坪
トナ

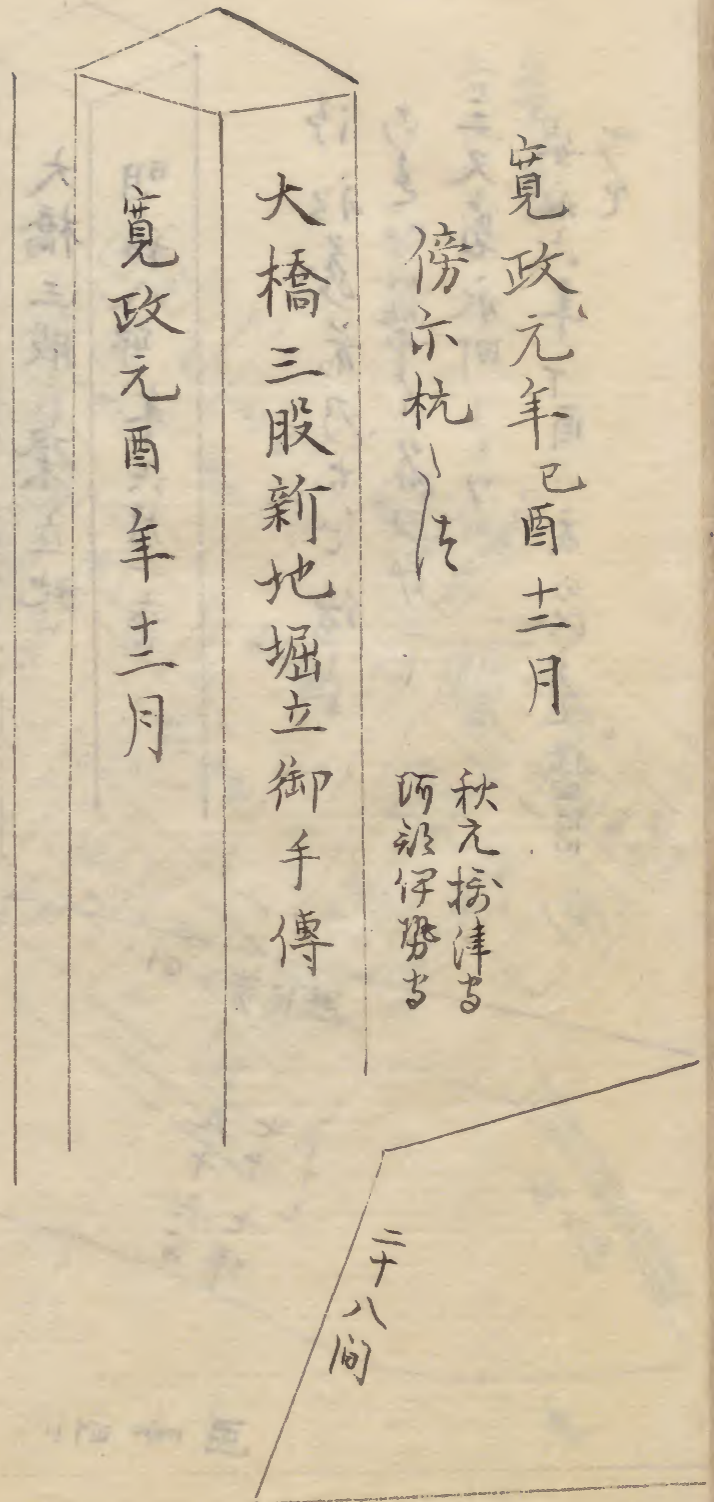
二百七間

七十間



明和八年卯上皇寛政元年三月十九年の事なり
 翌戊午三月の事なりえのこく大川とある

新大橋



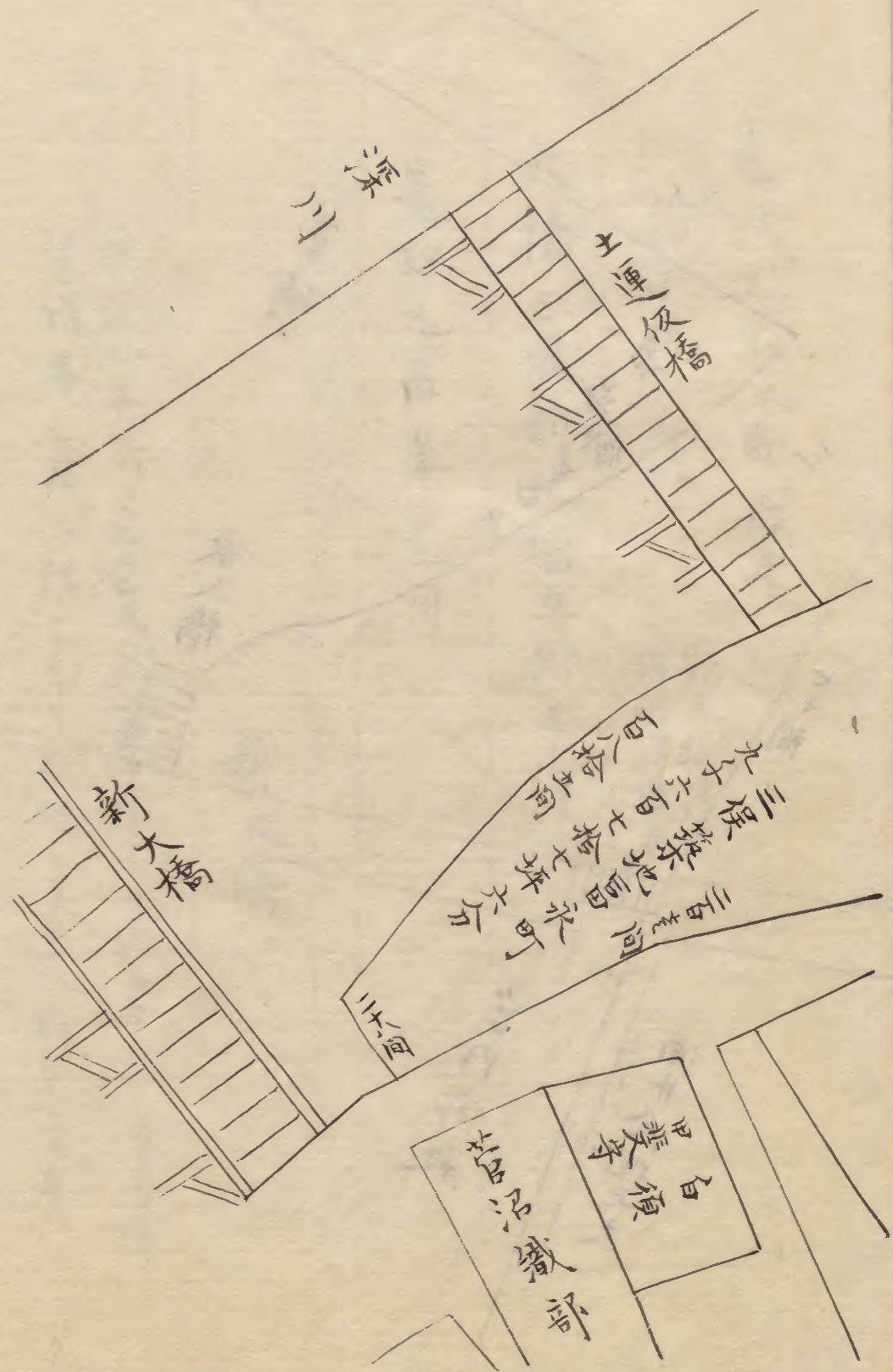
寛政元年己酉十二月

傍示杭

秋元揚津吉
 阿部伊勢吉

大橋三股新地掘立御手傳

寛政元酉年十二月



安永元壬辰年子込勘解由願之三股新地築立
 御用拭御目付河野右十郎安嗣九子六百七十
 七坪六分號三股富永町一茶屋九十三軒建寛
 政元己酉年冬大河渡付如元堰之河とある
 御在傳立花左近將監河部伊勢守秋元但守守
 江作付此土と飯橋を掛く源川運靈雲院
 其介ハ江並ハ

加賀美遠清之泉

江戸橋助東北

○江戸橋

日本橋より二丁目東

○稻荷社

とちの例より

○親父橋

お中橋より堂下より下りたる橋にむくた
目基右橋つかけ初めをる

○塚橋

塚に下り新枚木町よりあるものむく
とく者けり切白をさる橋より

○伊勢町橋

伊勢より流せ小治よりある

○道常橋

因布道常と云ふのけり

○松森稲荷社

新枚木下 神主小針河内

神社畧記曰昔は小松の森とて少の森
より数夜の火災に滅せ今社のみ
流るる祭礼を四月十五日と出る
つこの流の流
の流産より事と社畧記に

貞雄云或人のつり昔は小針孫右橋

と云町人居住するは屋敷の内より

稲荷の初より後延宝七年五月廿八日火災

ついでに河内沙類焼せしむは初のみ沙連
り法人を考とすも存吉川何某とや
る一人信作して新子蛭子と娘を津と和
做小糸と孫右衛門屋敷中村の亦さく
りきる中津藏小計中緒りては名字を
譲り譲りて以前町家のらふ小町の法人
の系譜すき及もあらしむと元禄十六年か
多弾山少阿忠晴と社奉行の時徒らと
とらりしとらり

○花町

本名孫多福町

けりむらうー西本願寺横山下小町一町櫻成ひ
を立花の花屋多くありしとて名之明暦乃
火災後本願寺ハ本橋下の築地小移り建名
み沙連

○仙居稻荷社 大坂下

○三十而稻荷社 大坂下

○富澤町

落穂集に涉入國後著述といふもの遊女町

近而於く是下四方の茨原と西表に於る夫
と切尾を著し河町と名付るる一と記す

○元在系

高砂町和泉町住吉町越後町方二町の所之
庵の所は心川の小堀をその所の曲輪の印堀之
今大門通りといふその所の大門は之といふ所
見申

負所進甫と長長年中進と記す小定
る傾城町あり二三軒と記す小町と内町

と並ぶる一と糶町八丁目の辺鎌倉河原
の辺大橋の内柳町は之也也大橋と云を今
の芝罌橋の事と柳町を今の名三橋の河原
に柳をうて柳町と云右糶町は傾城屋十四
五軒鎌倉河原同以柳町は二十軒程あり
之は系於万里小治柳の多場と云す傾城
町は一と系と市街といふもの天正年中
起ひく柳丁は移りて固て柳丁と云とも云
つる也一と西へ後府孫勤町移りて川橋

その概町のとき京師六條乃傾城町を以て移し
て介伏見夾町赤坂木辻等より進み江戶
移りしに慶長十年の次柳下の地倉屋上
ら進件の傾城町を今のとき中野誓願寺前
川越し世に傾城屋ともお考お談のし傾城
町場取立にありしに傾城屋とも 浄免
をき知りしに月基右衛門と云者初て傾城
るを京後河大坂を介 諸國の津湊惣して
紫呂のわりの先親より 浄免の傾城町

惣して二十四ヶ所を浄免北口橋小紫呂あり
に定る傾城町ありて取れ小分散しりて町
の爲りも懸ししに浄免の縁を以て傾城屋と右
三ヶ条の字左にありしに

一遊女に笑遊ひり者遊具好み子ゆきり身の分
限を不承家藏と云進めり傾城屋に入込長
居仕り共傾城屋の義をこそ者の方より金浪
ゆき中降りしに裁りも毎に遊遊仕りゆき
おのほりしに人親方へまると欠ヶ 割川貞

換 汝少事を傾城屋共今令限と限りに数日も
留置し居るを扱ひ去るに場決定メ其旨只
今迄を来し前の傾城屋共と一和子集吟味仕
自今一日一夜と介長數メ汝中より取り事

一人と句川の者之候前々が堅法制禁に在り而今
以粗事といふ当地清府内におりても人と句川の者
く不届者といふ其子細事と前因官所成者の
娘を若しひ子と名付貫並成長の後妻を公又
右抱女を公小出—大分の令限と取返し

仕いテ振乃不届者うまゝありて—その能娘と
五人三人宛も若子に仕十四五歳とて—其取しハ
右の如く書之し出—申し其の父母方々申取兼
以吾種々偽と—或々令限と—申取兼
父母お果申し又と遠國振子—在りしを己
自申し仕傾城屋小賣出—大分の令限と女
申しテ振乃不届者人と句川の事も仕
振子多知い妙影成分とも—其旨句川の者若子
と取對して傾城屋公小出抱少若子及兼

中川傾城町云 行舟一舟子石集の中川者
之故を中不及其子娘と助も吟味仕方
成者なきに也一川の急な川下上り

一 近年世上辭遣ふは濃易汚平物の心事も
証不遠りて自然逸名を伺ひ愚事一と企
一 市法派人の類もててて死に多かり左極成
愚黨の類も人目と思ひ仕可ともお定丁
流浪波て居るは極女屋の故を全根とて不
きいしと上り論交仕は故も全汚座歳日也

為道中川の如くの極方くの極女屋杯ふは
以事も難計いけ介尚座も極く不居仕出
者欠落杯仕尚分く一極を極女屋に極ま
しる一和を以て在るは名不々の極女屋小かく
子女中も縦令汚論美者減るといふ其極
内は小入中も交々を存いけ故を然し通し極
町一々不小は作付は下いけ故を許更念入何者
其も不居者傾城町波能細くとも者の出不
吟味仕候交り急な川下上り事

右と通涉在り 涉は織様涉度大に涉慈悲を以

奉願の通に 作付等より疑有る事以上

慶長十七年之次

杵丁在因 甚右衛門

右領書町奉行米津勘兵衛田政に是出次不評定

所は 右領本多佐治が正信忠度より取上りけ

り 元和三年の法 三月と定めて
西の日記より 右甚右衛門に 右

出本多正信より奉行忠度より 甚右衛門取上り

は 佐治の形に 作付りしを 堀に 小玉近侍女に敷一切

是並申す事は 忠者より 小形より 甚右衛門

英領城下の者共役目より 意取渡出りし事

中候より 小奉行佐治の女に條の書簡より 字

一 傾城町に 小傾城を商賣し 子より 甚傾城町

圍に 介何方より 府に 未より 是先より 傾城を事

向後一切可停止事

一 傾城を遊ひし者 一日一夜の介永致渡り事

一 傾城の衣類熱雜物 金銀指輪等 一切は 是後申す事は 何

地より 緝屋條より 事

一 傾城町奉行 菅清等 英領城下 不評定 役人等 江戸

町格式之通意を相勤下事

一 武士商人施く者小石浪出和悦めざる不審なる者
汝細細少を恒和汝吟味流不審、其見可く其以和
下流出事

右ノ通ノ意及可相与者ノ

以希より甚在焉、在尔惣名と勤む本出相列小
田系ノ者北條家落去以流江戸より来りきる也但
元在尔と音倉町の下より四方ノ場不察付不
浪より其茂生流りしと繁葉之りし一在茂

系ノ云々、マセ、文字と後、在り書
整多の由元和二年より地形普落中不柳
同年減然して、其月より一因高臺と、也に
戸町吉丁目と名付、一率由一統の後、初分園葵
也、傾城町を江戸町と名付始、柳丁に位
居せし、甚在焉、江戸町、川越、之、同、丁
目、と謙倉河原と位せし、傾城町の者、其、川、越
一、京町、丁目、と、糶、丁、と、位、せ、し、族、川、越、一、之
是、元、来、京、町、と、来、り、者、其、在、之、和、の、名、と、

セリ同二丁目と上方の傾城屋も此より移り
く一五年遷く屋作より新丁と名付ゆ也
角丁と京橋の角丁より傾城屋を主人計り移
りしを名とす但寛永三年此町作巴戸沙
出来夫より又丁町と云ふ中より一相明曆二年
十月九日町奉行石若右近將監貞清若原乃年
考も石若中濱より今近の若原町北面
湯用地に付石若右近地を湯菜のりし日本堤
の町内の内より取所の猪子志し心記ひ下町中

濱より之年考たり丁と甲年余在之し前を
遠方へは裁長縮裁の裁中よりし不付候
相渡の上日本堤の考り考り交渡してお取ゆ
考り石若右近右近貞清津尾彼前考元猪
り濱より考遠方へは考り考り取不地考り考り
考り考り濱より考り考り

今近二丁四方考り考り五割増二丁三丁の場
考り考り今近二丁計高賣考り考り考り
考り考り考り引料由令考り考り考り考り但小

間寺名小拾四支ありし之遠方之遠き左出火
の節火消留の町役 湯免之と中候され同年
十月廿日湯茶湯落(右京町年五月仍事等
張紙湯令頂戴可し)之以希屯引紙一傳六
くく者物と右京の者共明年三月迄引紙
りなり一紙ひ者内之翌年三月十日の大火
小恙々類焼く之純温子及し之以希又作出
ゆを形勢と交進り之作と之先小座之け改
張を極小との改之少座之けを高貴し一形

比和同年四月石若右近將監神尾佐前守日根源左
衛門督日本境(之希見分あり)新右京之湯相定
如比和同年六月上旬又事仍和之在右高月
中ノ恙代地(引紙一)中之但家作善法乃
間ハ今戶村多越村山若村中借家より一
高貴務多小(中)一(中)右之村一百姓共
之と之伝之作法の一(希賃相對して改名
中候而之通り借家より(改名)六月十日
小恙右之村借家(引紙)同年八月新右

京夢傳能成りしし川移高賣りしし
一 日本橋大門北近五十間有る付五十間道と名
付中川去りて大門の方より坂と名付の衣紋
はくろひぬれぬ衣紋坂と名付中川初め右坂
が大門に近き所を付ありしと神尾氏
繩ゆき三曲りよ坂去りし廓の内足邊に
中振り坂ありしと但新在来丁へ川移りし
町二丁京町二丁南丁は五丁と元在来が五丁
りゆき場金町と元在来小あき名は五丁の

内二町三町よりしと新在来は川移りし場
屋告一町へ集めし而揚屋町と名付しと五丁町の
者お多し一町と名付しと五丁の
高を流浪小勅来りしと境町と寛文八年三月
江戸丁二丁目名町人共の類ひして西へ扇
の内ときり新屋小堀境町と名付し時分端
くの賣女汚制禁を賜ふ茶屋賣女扱も在
来の者へ流浪を名付しと類ひして七拾四丁方
しと古京へ川移りし信定はせ高賣りしと

世に傳ふ事ハ是も境下迄之ル節 因付小部之
一江戸町二丁目ノ年寄大老生國伏見の
者共々々々各付一と云元吉宗大門口にも
獨々の控女由制禁の清く札をく新有糸
一引ケる由札由建法にて後迄漏七年川に
控女由宗恒能勢由雲吉類相事等の付之札
建替事しそ文小引

寛

一け以前の制禁之通江戸獨々若控女もく隠

並にりり書下ト下り出ハのまゝ小部一書者之
一不依何者馬系物醫法の外一切下高安中附り幾長
カ門口一控ク一為停止者之

戌十月

存し之札由建ル節為檢使大久保左衛門中島
長右衛門江系一と云

定

一從前々如制禁江戸町中獨々之近控女之類不可
隠匿若違犯之案ハ其下其下名主五人廻地

新吉原大門より水道尻末間百三十六間横京
間百八十間ありて惣坪数貳万七百六十七坪なり
一 元和三年傾城町と場町を以て明暦二年迄四十年
の由明暦二年日本堤小川越安永六年迄百二十
一年乃至十年敷合て百六十年なり
右志享保十年己七月新吉原始原涉舟舟
町より大島越前より江戸員濃島木書上迄と
大島出山越前より安永小進南迄

○祿直町

今更替町といふ

寛永の初は所小橋養う芝居志りしと云

○芝居

坂町より下小川

中村勘三郎芝居々寛永元甲子年二月初より始
り中橋より芝居無形を寛永九年伊豆國より
河宅丸の涉船涉苗地へ入船の時金の麿を以て此
船の先を喜院と名け是を祖勘三郎と慶安四
年辛申正月より四月迄涉株を満座と名け
同六月又文喜地合入の猿若の衣装と名け
り) 坂町より芝居無形なり

明曆三年丁酉五月京都(上)大内(右)是悍新
發意石(是)様着相(之)を(之)清麿(兵)と(て)様着
衣裳(と)揚(る)丸(の内)之(ツ)栢葉(糸)を(て)纏(合)取(と)て
前(と)付(し)様着(衣)着(と)頂(戴)を(悍)子(明)石(と)り(ふ
名(と)江(平)同(年)九(月)江(戸)へ(下)り(万)治(元)年(元)祖(勤
之(節)西(死)と(二)代(目)明(石)勤(之)節(三)代(目)勤(之)節(子
後(小)中(村)信(九)節(と(云)尚(村)勤(之)節(ま(し)七(代)之
市(村)字(左)馬(門)芝(居)と(元)祖(村)山(又)之(節)と(て)衆(列
隈(の)者(多)り(初(て)江(戸)へ(来)り(旅(を)り(て)分(年)役(と

奥(仍)其(踊)子(二)十(五)人(之)外(能)の(同)相(云)相(と)り(り
其(の)是(寛)永(十)年(之)兼(應)元(壬)辰(年)右(又)之(節)病
死(り)聲(村)山(九)節(左)馬(門)谷(代)と(り)市(村)字(左)馬(門)并
彦(作)と(り)ふ(者)お(座)元(り)右(芝)居(お)績(を)市(村)字
左(馬)門(悍)竹(と)並(と)二(代)目(明)石(勤)之(節)門(中)之(代)付(勤
之(節)が(鶴)の(丸)の(紋)布(と)纏(と)り(物)子(や)町(中)芝
居(と)立(て)寛(文)四(甲)辰(年)より(二)歳(之)費(と)し(き)相
と(と)工(夫)し(初(て)作(ら)今(字)左(馬)門(近)九(代)と(り)
上(坂)理(芝)居(と)正(保)の(法)薩(摩)寺(曼)澤(雲)中(具)と(て

子子薩摩を其の才子女佐を丹波を其の才子女
泉を其の虎を源を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を
より辰松八布を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を
丁山本出羽を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を

江戸橋 東南助

○青物町

○海賊橋

又將監橋を云 其物より坂中へ向
むう海賊を以向井將監殿を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を
家系景に云向井伊美信正勝後伊美守と云 初勢別

人武田信玄女は(天正七年九月十八日討死是向井家
の先祖之

○中の橋

川殿石町の通る一谷小湊橋と云

○越中橋

松平越中守殿中きの前より其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を

○倉橋

本村本丁四丁目五丁目の間の橋は其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を

寛文の頃清原野の時清原をうけさせしより其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を
貞雄云け煉堀明和元年其四月九日の火災より焼
亡して今を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を其の虎を

○地蔵橋

亀島町の間の橋と云

此所の乃六助小... 此乃真途の事也

○合引橋 南八下坂本多家伊達家屋敷の例より

此橋の下沙... 此乃真途の事也

○伊雜太神宮 北八下坂 神主 出口市之進

神社啓蒙曰伊雜宮 儀式帳云在志摩國答志郡 伊雜村大神宮相去丁八三里

粟嶋坐伊雜宮二座 世記云天村雲命衣間天日別命子玉柱屋姫命

業伊雜宮大神宮ノ遥宮也 世或ハ為儀宮一且称大神宮御

鎮座者非也ト云ク

或社司田尚小... 新瀬音也云

者公莫大成... 伊雜の神宮罪不

處也... 伊雜の事と仮小移

○山王湯... 永田町山王の持

○茶師堂 同前 別當上野末彦王山智泉院

本寺を惠公僧部... 山王の本堂也

安造と畧縁証... 茶師如来と惠公僧部

二十一茶の湯... 彫刻一尾を納置

むし星を素と經く相模小大場村小安並一崇塔
も日河もくく放統せり御多小水條氏の去大り
掛焼亡とくくも縁のく換壞一玉川次その
後寛永九五申年正月八日より十二日近靈験の事
をく願主河内郡大場村より以事と請ふ河内郡
氏慈眼大師へ告ぐ彼の縁と東叡山へ移し
之後尚院才二世及元法王へ大師附屬しゆい及
の古々山王遊幸の所りて郡城より東小河を
如来河内度の地ある事と志る一くく

岳跡々山王権現都城乃産生神也 本地々別業師如
未ある事と志る一くく一くく一くく一くく一くく
永十二乙亥八月廿日小苗比々安並一くく一くく一くく一くく一くく
と考す一くく縁と安並の後大師の命より因て一くく一くく
一くく一くく一くく

○天満宮社

江戸砂子菅仲真年乃聖像あり一くく一くく一くく一くく一くく
井帯刀一物持と云

○鑑海

和名千一より小細丁二丁目一くく一くく

里淡小之姓吉は道入に... 大坂より源頼義奥
別へ下向の時賊は風荒浪を帯... して吉成は糧を
沈め給事小いの事 酒の事をして 終小奥別へ
織造を下りしふと

○覆り測

田市牧野家屋敷の例より

○甲塚

田市牧野家屋敷の内小より

姓古八懐太郎義家父頼成於長乃吉覆と相り糧
塚と名つらば河洲壺井記小... 致し吉成
有り 江戸砂子小より小山の上より下の石を文字もる



くまのちのこ... 長き石をも頼成焼と納めり
親王御門の首と切て甲と隔て... 追指来るうは
所めて甲と取落し... と塚に築込... 甲山と云
り項年近は屋敷の内は塚山の松も... 大木なり
し... 大火事の後に... 是れを...

按はる小江戸砂子の... お遠く... 江戸
くまの事源を頼成義家の軍とあり又ハ
将門頼朝の事源と久安を... 此れあり

あるとゆき後人よりゆきむし

○靈巖橋

うき所々靈巖橋(こゝすき)

○龜島橋

靈巖橋の並川口町より八丁橋(河)

けしとえ津羊中わたるるといふ所(掛る右橋の右)

○八町橋

紫の(こゝ)に(こゝ)寛永年中(船通)の(せ)め(小)八丁

小橋(こゝ)さ(こゝ)也

○言橋

漆町(こゝ)八丁橋(こゝ)

○稲荷橋

八丁橋(こゝ)南の橋(法)稲荷(の)社(を)

○稲荷社

橋法(こゝ) 林主 南表山内記

○狭炮洲

寛永の(は)井上(橋)の(友)家(大)岡(の)所(を)試(し)不
る(今)と(は)不(全)城(中)遠(く)と(き)て 鎌倉(中)井(の)渡
り(大)岡(を)替(古)河(の)後(は)築(立)ら(せ)し(一)般(小)
は(若)り(地)南(水)凡(八)丁(と)續(江)戸(砂)子(小)る(也)

貞雄(云)ふ(の)島(乃)形(狭)炮(洲)似(し)け(極)小(名)と(せ)り

とも(云)延(享)園(板)の(江)戸(懸)麻(子)名(不)大(全)小(足)

あり

○寒サ橋

決地剛く築地小寺一名明石寺と云

俗小寺んはとと云

○萬年橋

一ハ板少ク橋杭を石あり固ク万年と云

○ト養屋敷

決地剛築地明石町の裏

半井ト表け所小屋敷洋領の時海

ト表本及とを思ひとらとをふ料を

○予寛文の江戸繪巻と所指は地を足る小十軒町

○の南の末より

○西本願寺

築地

永徳より輪番

寺傳云元祖上人より十世顯如上人と文禄元年十一月
廿四日此寺を所と准如上人也是西本願寺の祖也天正
乃比破るる東の二流小寺と准如上人と寛永七年
十一月廿九日小此寺其次良如上人寛文二年九月七日此寺
を所寂如上人也涉入國の初當寺と涉茶橋の内横
山丁三丁目南の少寺也寺地を小明曆の大火以後
け所へ移さるる寺と塔院の分貞雄進補也

圖正寺 淨見寺 法照寺 法重寺

西本願寺

○ 宝林寺	梅岸寺	万福寺	西照寺
○ 浄泉寺	正善寺	長安寺	真龍寺
○ 妙善寺	光源寺	妙泉寺	正満寺
○ 正法寺	應善寺	明西寺	延浄寺
○ 善林寺	福泉寺	真教寺	浄念寺
○ 敬覚寺	久寶寺	長泉寺	浄光寺
○ 善正寺	安養寺	真光寺	常栄寺
○ 善久寺	西念寺	善照寺	覚證寺
○ 浄立寺	法光寺	成勝寺	圓光寺

○ 万行寺	報身寺	正覚寺	勝林寺
○ 浄徳寺	光西寺	延重寺	源正寺
○ 福祿寺	妙覚寺	唯信寺	光徳寺
○ 圓徳寺	祿楊寺	善永寺	妙延寺
○ 實相寺			

吾妻日記より、明暦四年本引町の海子奈
 坂小日向等築地小立作付とあり、明暦四年
 三月朔日、沙日記云、本控下築地、幸以長谷川
 三左衛門代り、とて法久名号、右衛門作付り、とあり

○ 灵巖島

江戸中巻と云ふ

寛永記ゆゑ寛永元年灵巖旌善上人法力を以て
江戸八丁堀浜上と法檀那土石を運集り陸地を
築き一字と建てて霊巖と号し是を灵巖傳
と云ふ万治二年八月三日霊巖と云ふ所の地中
ありと云ふ

○ 一之橋 二之橋 三之橋

新川小川

○ 随見面

一橋

茶碗店

江戸砂子後篇ゆゑ川村随見筆宅の一所に世随見

老人と云保年中 諸州の風土を考海を公樂川と稱
すといふ小田畑と登り其土地と知る事各善人の

○ 大津官

新川

海州 慶光院扁地

婦女傳云山本妻と慶光院用山比丘尼の子孫より
今よりゆく慶光院住持とて山本妻娘之山本妻
と三百石ありと云 將軍家涉伐く涉師之慶
光院格式を涉師誦と云ふ江戸と云府の節と云
中涉系下傳馬にもく江戸 靈巖島小川と云
交洋領事と云府の折々の様亭とするこの地

子一社と建く伊勢を神宮と号すを介大神宮
の社を國東と号すを神明と稱す是伊勢天皇皇
大神宮と号すを釣合子依くを云

貞雄云明曆の江戸古繪糸巾は今の堂
上覧所の邊に伊勢上人の廟あり今の
新川の地を以て整地する事也

○橋本稲荷社 灵巖宿惠徳寺 別當 其云末
言此末 醫王山田菟吉
畧録記云尚社正一位稲荷の社とてのを紀列云此
山乃植麻橋本の里に官岳あり弘法大師乃云

從へてむう大原入唐乃内葉葉に於てをうて
出現の心は後洋船の次を京東有清建立の形
う不思慮に應況しもの乃清空を大原ま
のりて移しり日域隨一の靈縁之形を小の
靈巖宿と姓在中宿中号す一時神神を以社
に移せりて靈巖一島の法号とてを事也靈
驗感應の事考す事考録記よんて

○本寺茶師如來

尚古本寺 瓊瑤光如來と三洲風未古の茶師如

未と因本因作うて理趣仙人乃彫刻を所之に言
像とて而も安座しし事ふ来由と尚古の先任風来
寺より移轉の時其後を慕うて法衣一着より
取小尚古の山跡と医王山と移りし傳はる像成
医王菩薩とて中を造ると

○惠比須社 其處傳

○稻荷社 因和

け社とむうと今の向井家の爲愛の弟を向井お監
及汝織橋よりけりし屋敷の時に社と云く移りし

よー江戸砂子おり

○漆橋 靈巖高より其橋をすけ川に新橋と云

○豊海橋 佐々女と云 新橋大仏の橋と云

○永代橋 長元百十間余 幅三間き大寺

け橋と成流ふ云 憲廟涉羊架の時にけらま

橋ふ永代と云ふ名付らると云 元禄九年始て

るを以前と源川の太橋と云 新橋と云

○箱崎町 小新橋の町 新橋の向ふ

求涼雜記云筑紫箱崎乃縁と云てけ町の名

とて好ふ深川八幡の事礼申す神樂好むては不
近来り多之是も籠は家お傍へ多礼申す八幡乃
神樂来りり小例なりやそ又或説ふむう一は小
おの池なりし申の石ありしと云ふしふうきよ

○崩橋 宮崎町より小細丁三丁目より橋をく

○永久橋 これより一のあり

或説ふ南橋より漆橋近江原の築地をむう一を
くう一と云保の比漆橋後の所揚土より築き
一石之漆をくうを南築地とも云古例より宝曆乃

漆橋後の所築地 きると

○石川島 石川氏代宅地

諸家續胤曰石川重次其子改次慶長六年川使友
同十九年漆目付其子重信代は地小位なりと
説り

貞施追甫或人の説ゆ云 大猷公の漆州異國より
遷吉領と執と申す一は漆と云を築き出
く奏者と云人なり 公乃のまめめ
旗本の内穿鬘を正魚と云ふ付より石川氏

の先祖方めりて 將軍家名名の通り彼
獲と行子ゆて指せり披落志きり公威
の上涉鷹英の取とせむ(きと)作りき此ハ
い島と洋領し居位一永代築出―宅地と
廣布中夜と欲あふ小所居ふまう也、此下
きりより今ふむていさうせり築出―いさう
とらういふ小獲―はともさう

○佃傳

あゝ奥の谷下

む―杉津國佃の獵師此地と洋領し居りて佃島

と名付之再板し戸砂子云佃島とて中安後右京進
殿のやき之殿と稱しる右京進殿墓のあり―
今より安後家より弟とぬきとて魚人も又奥とま
らば彼家の抱の獵師那と違風之伝者と祀るハ
夫より後の事ありとやとさ

○伝者社

佃島の内

此と津古日向安後家好冒

此の―毎々皆後人あり杉津の若きれと伝者と劫
獲―法書とて記す砂子ありとせり

神社考曰杉津伝者社主四座社家者説曰第一天照

太神第二字依明神第三座筒表筒中座是以第四神
功皇后と云御まを尚社も右の神御之

日本橋南筋

○日本橋封疆藏

明曆年中初て御名むりけり不々四日市場と云村
中志て四日と小市立一所のり

○式部小治

日本橋南三月新治と云り

寛文江戸景中久志本或部宅地けり不々河々堀小治

貞雄云寛永九年壬申九月六日 大猷と云り久志

本或部(は舎不屋敷と下す)と前撰集云々

○鹿兒嶋稲荷社

久志本氏屋敷内より

寛永永年中薩易の屋敷より勧請のり

○油町

○新橋町

○篠原町

通四丁目横丁

○下横町

中々入堀の河原邊にけり不々河川と云

○中橋

日本橋より南

江戸砂子と云日本橋四丁目南之是今京橋四丁目より中橋の

高平なる故云橋と云し上は寺町南は寺丁のる二丁
廣小治あり

貞雄云橋々あり寺と云しお橋の中ありを中橋と
云し書々大なる湯と云し是古し一の事と云し且
して極量あり書々流と云し一極小は中橋の
橋も知系川とて其暇橋渡治橋のるの湯場迄橋
つきて今中橋と稱せり和州と云し一柳て是と
中橋と云し一正保の流け橋と云し其地と云し
今のゆく故と云しおと上古橋あり寺あり地

谷々を成し事難ひあり橋々あり寺と云し谷付
るゆらゆらと云し和持の寛永水の江戸繪系に
云し一と云しあり

○知系川

下まき丁と大橋丁の間入橋と云し

貞雄云湯打入の後橋と云し川へ正保の流中橋
より西の方湯場湯迄の間入らまそ湯地と云し
まゝ中橋あり東の方も安永年中かゝ地
らまて松本藩南を湯領の地と云し是石川
の流ありと云し

○お満稲荷社 中々

道の傍より阿蘇長徳院の町屋敷の内中より是
より稲を神奉り持たるる所より中橋おまん
稲より享保十二年丁未四月長徳院息女の
事にはかき不仕儀の神威ありて稲を神奉り
野休有夫中果よりむ妻より著実其事にても
多分小略

○大湫^{ヲカ}丁 中々の河原通

○愛相橋 おつ丁に河原橋あり

○鞆町 南信馬町東横町

○鈴木町 南信馬町三目横丁者店

○常盤町 南信馬町横丁

○具足町 表八条町の河原通

○王木稻荷社 多々丁 神主 鈴木大隅守

○観世稲荷社 系橋南三丁目横丁

観世古史稲荷の法寺といつてもはたはたし
と云ふと之を観世の家と信じておまへ伊賀の服
袷一葉より東山殿にきく観河弥と云

明るし染女保く猿楽の業をありしと女勤
むとの子世の孫その子音の孫とて又親世三十而
と号し猿楽とあり今春の聲と成て孫藝洲
塾一子孫お嘆と

○京橋南節

○京橋の通りを銀座丁四丁目通りと云ふ尾張丁二丁

○竹川町を丁出雲町を丁より又より新橋之

○紀伊國橋 木徳三丁目紀伊清彦屋敷を右に名付

○新橋 同早目度小路傍に染女ヶ原と云

け地しありしと松平宋女正定墓の教ありしと享保九
年甲辰正月晦日の火災より類焼りて後揚地とあり
く新橋場杯築しありし宋女正定は豊地糺町三丁目
の地表より深鎖をく者之今も居住するところ

○木挽橋 同早目より三十四間幅の深鎖と云

○宋女ヶ井 染女ヶ原の内

松平宋女正定居住の時の井之屋敷をわたりき道とも
け井と今に糺下の屋敷より日毎不潔とけけ又別れ道

○火消屋敷 本橋丁五丁目南側井生の屋敷と云

今の柳生家の御家いし、定火消、涉江宅あり
これ、享保九年甲辰正月晦日の火災、子類焼けりて
後に、涉江宅に口若、涉江の肉、移りて、これ、前火消
と朽不之、様、並、綱、あり

○芝居 本橋下五丁目 歌舞伎 森田勘次

享保二庚子年太三情と云者、初て、以、芝居とて、後
小坂、東又、九、席、次、男又七と、古、三、席、若、子と、一、森、田、勘、次
と、云、又、九、席、入、在、本、と、澤、と、相、續、り、と、り、南、勘、次、近
六代、より、乃、小、享、保、の、未、勘、次、替、芝、居、休、一、内、河、系、傍、橋

之物と云者、能ひく、芝居と、初、心、後、又、休、一、五、再、心
能ひく、南、勘、次、と、相、續、り、と、り

○芝居の舊跡 同丁六丁目、今、町、家、と、云、 貞、旅、進、甫

い、り、く、と、山、村、長、吉、芝、居、り、り、正、徳、四、年、甲、午、三、月
五、番、涉、江、如、中、印、傳、涉、江、仕、並、一、件、の、席、長、吉、と、遠、島、文
伴、付、是、り、り、勘、次、と、り、け、外、太、右、左、丈、和、泉、丈、丈、操、芝、居
と、今、と、綱、あり

○汐苗橋 同七丁目、芝、苗、新、丁、と、云、り、り

江戸、鹿、子、由、云、昔、は、和、泉、屋、同、屋、り、り、と、云、り、り

小大妻也云りし渠に男子数多りし嫡子八郎
家と云く後小及蓮也りし二男今云源左衛門
昭源の家別也云りし三男大妻也云りし号す渠
と武田信玄の妻と云りし甲州に任すも子後
大久保十兵衛と号次後存るも不任と云て滅
亡次との伯父大妻源左衛門也ヲツミ轍の家也云りし其
亦大妻源右衛門也云師と云りし及蓮也云りし次男
今春惣在也ツイコ大轍の家と云りしと云

○八官町

お登下ノ南

元和乃法公信と云唐人又屋敷と云り右に町の名と云

○穀豊稲荷社

同不

神主宇治川若狭

尚取地主十右衛門屋敷の移也云

○日陰町

お登屋橋より山下町の橋端と云お名山下町

○有楽原

再板江戸砂子小と云り数寄屋橋より外慶小路より元
数寄屋下二丁目二丁目の不ありと云慶長の比藏田
より小尾を越下より後明地と云りしと云

城南

○櫻田

風土記曰櫻田郷公穀四百六十三束三字田号櫻田者以其郷之岡及野櫻樹多也

源順和名鈔曰荏原郡櫻 佐久良太

新著聞集云櫻田虎の門より愛宕迄田地少く畔水と橋の木ふ万布も有り田の中の流を櫻川と云ひ今の源也橋と所の名も小く流ると云や上畧求涼雜記云けささ流入水埃吹上流屋へ移さ

○貞雄云は求涼雜記の後信和あり寛永明曆

○年中近吹上の色に乳流之氣を介話候の叙

○りて吹上の流産稱の処右端是不足之と按る

○又流丸の内流産極まかしく川と違ふを誤

○り傳へて吹上めて書しりや

○山下流門 又櫻橋 俗に鴨沼流門と云

○寛文江戸圖に非流門と有り山下町より山

○下流門と云有り 又櫻々井 山下門と幸橋のる太と涼小と

け姫の井とある所は、け姫の井と云ふと、け姫の御殿か
一年の白米を計つた井の中へ古来より年々入る
と云ふ、この井の蓋と云ふ、こゝまで、菜内の言と
して、うさぎと云ふと、左のうさぎは必凶事あると云
ふ、うさぎの流と云ふ、おきて、あを流と云ふ、あ
うさぎと云ふと、再板の戸砂ふよるへ云

○封の井

横田のうさぎ、不詳と右因本より云

○幸橋の井

又幸橋の井と云

○新橋

幸橋のも、延宝に戸繪景に相と橋と云

新橋、随来り云む、と、新橋、芝と清つ、あり、富永の法
出、来、享保九年三月廿九日、大火の付、燬失と云

○虎の井

新橋の、の、お、あ、い

世業の一本、お、あ、い、田、及、隣、け、井、あり、出、跡、せ、々、万、民、共、小、田、
園、あり、あり、子、里、あり、あり、事、あり、あり、子、里、と、帰、り、き、
い、い、んと、祝、して、虎、の、つ、と、名、あり、あり、又、清、入、國、の、付、
右、今、の、ま、も、ま、つ、る、よ、う、と、記、さ

貞雄、ま、右、の、程、も、信、用、あり、あり、大、猷、公、の、代

寛永十二年の江戸系ゆきへ浦化の道近汚垣
 のてふと砂道とも今の虎の汚門の形は汚門の
 形よりいさうゆきへとて家を以て按ずる寛永十
 三年より後汚門と出来しとてとて名も汚
 二年乙亥九月朔日汚日記より曲輪内口より近
 汚敷云是汚門の番也 汚門虎の汚門遠山久
 又一柳之根云 汚門とて是をいれとて万
 治の汚門もや虎汚門物来とて一事とてい少
 虎汚門と享保十六年辛亥四月十五日糶丁二丁

目横丁野一島外記宅より出火して敷を焚き愛
 岩下芝海に追焼亡とて汚門と焼失しとて
 其後汚門再興あり

○白糸の滝 松平藩別荘の向ふ方にあり
 江戸砂子ゆき玉川のゆきとせき入しつても終せぬ流
 の下へ利ありゆきもゆるゆや
 けいりゆきとて白糸とよぶゆやとてり
 或説よ云虎汚門の内内後後後古殿庭の裏より

河内池ノ落も滝ノ麓も僅の向西を平地めて
麓のくも趣き千きにいつとく世説非なる麓列
との向を屋敷今其旧跡りりとく

○潮見坂

松平因防公と松平維列公の居るの坂をいふ

○柳の井

朽木家の居る所

江戸砂子後篇ノ野中の井といふ井の事也や尋ねし

○霞ヶ岡

松平安藤と松平維新と松平維新の居るの坂

武蔵の地名考云上右と在る所も今も今も豊
後記あり或古記曰在る所也霞岡日本武蔵と為

帳夷之諸関ニ爾来連綿大被置之舉國之勝景而然
其遠眺隔霞雲故有霞関之名云々

名所方角抄より小正庵の関ありと云岡なり東向の和
あるは富士と見え西中川流すところと云々

秋の初是より小正庵の関ありと云岡なり

續子載集英

前大納言為世

おろしんふと云ふ正庵乃雲も此雲路の丁と云ふ
——と云ふ

岡英下

従二位高下子

別進中ノ兵乃七段の雲とてなる月日とてさうやとて

新拾遺新上

ふみ人志つて

いづれふ名とてのこりて東路の表の國も其と書ゆる
宗祇廻必記ふふ名をすゝ表の國をすゝくゝとこれ
おろと連ふをやといひてさうふ

東路の七段の雲小年紙いとまを七段ふふちを帰らん

新中いづれとて進とてまもこりて表の國も其と書ゆる

住者は不と七段山と云右大将頼朝天下と始め法より
守護とて進た置小地政とては奥羽海乃を隅田川

と限り七段山の後の植麻ノ要害とて構ひてある國し、名
付に不と布を長とてさう布とてり性還のりて表
山極荷の社傳は見ゆ

○陶山ノ関 松平固防とて内友後後とて中てそのりて

亦澄澄坂ともいふけ坂めてあらへて三年の内は死す
とてふ後流る進とてに不と砂とてめと中

○蝶螺尾 一名管谷

虎歩のりて永田町へ出る南の表通る之曲りて表
板の名なり又け迎當の多よりとてりて管谷とては

○永田馬場

江戸砂子云永田氏の涉旗本形と並一不今ハ永田若次郎の御家のことなり

貞雄云是お遺り今現ハ永田は過ハ永田右三郎大園家の前々御家なり

横丁ハ小寛文江戸累々長ハ馬場也

ハ涉馬屋ハ取少ハ永田ハ馬場と云ハ

田成中キモ永田信十郎及永田市十郎及中キ

只二軒ありてハ一志ハ長ハ馬場と云

ハ本名あり一ハ中ハ永田氏御家多クありて
ハ名ありハ近世又永田右三郎及永田若次郎及
中ハ只二軒ありてハ

○菜萁樹坂

丹羽家表ハ見通一内庭記伊中庭ハ多ク伊勢中庭中
庭表ハ九危長ハ中庭中庭ハ前ハ出ハ少坂あり

むハ一ハ表ハ少ハその木あり一坂ハ石之

○早野山

山王権現の山と云

○山王神社

永田馬場 永田馬場 永田馬場

諸社一覽曰太田持資長祿元年築江戶城文
明年中移山王權現於城管之中云云
神社畧記曰按小日古古近江必比叡山法寺也
祭神大己貴命乃子大山神身後小敷神也
系ノ凡二十社云々云々

二十一社ハ謂 上七社

○大社 大己貴命

○二ノ宮 國常立命

○聖真子 天忍穗耳命

○八王子 國狹植命

○十禪師 瓊々杵命

○客人宮 伊弉冉命

○王ノ宮 惶根命

中七社

○大行事社 猿田彦命

○早尾社 素盞命

○新行事社 灑津姬

○牛御子 五百箇磐石神

○下八王子

天御中立子

○王子宮

天兒屋根子

○聖女

下照姫

下七社

○小禪子

彦火々出見子

○大宮電殿

真津彦

○二宮電殿

真津姫

○山米大明神

琴御館宇志丸

○宮殿滝社

踏鞠姫

○釵ノ宮

金山彦命

○氣比社

仲哀天皇

折尚社系礼々 古徳公の湯代元非元之命年
 六月十五日初て江戸山王産土の町中を云々
 乃チ之を介の粗満万より系礼の出し初り
 物不湯城内に掛布 横田元官より海へ下り
 中江 津付ありき 吾思ひく出し 練物と書候
 此大徳寺町より大徳のより子窟の系より出
 今徳公より三宮の湯多門より

上覚より昂 上意には誅殺若流して吾
 不覺と云ふ平の代を祈りしにけしと以
 る末代也一為子海世と祈りしに今子也
 上意の如く涉入國以前迄を本町に下目
 桑首場中より中依り山王并明神の五
 祭礼を神輿并鉢物不也今子玉きて海
 下りしに
 江戸砂子云當社を入同弱川越仙波より不
 にはり慈愛大師弟創りて是地山云是寺

と考へ天台乃其地とて山王と勧法と太田乃
 備文明年中仙波村是地山の山王と勧法と
 之化今山知系山と云兼應二年小湊化
 のより移りしに是今の社地也と云

別當 親理院 社僧

別當	親理院	社僧
福聚院	常明院	田成院 成持院 宝藏院 長命院
智光院	宝泉院	無量院 智葉院
社家	小川織部	千勝主水 千勝采女 金丸敦貞
宮西頼母	正木主膳	諸井帯刀

○檜樹 涉本社内陳乃後神水のと云々しり

尚社の祭礼を六月十五日隔年より江戸才一
乃大祭礼之

貞雄よりけ書は山王の社と知系山小動
法行と兼意二年中酒池のよき移り建し
とある中法橋町法行外貝塚に移り建し
一事と近江氏より書し移り建し
のよきと此山王兼意二年中酒池へ移
り建しとけ書は江戸砂子とあり
け兼意もお遠より予明暦三年酉三月同

板の江戸景を築しとあるは糞下半袋
法行外今の元山と称する多小官より兼意と
明暦より以前に兼意三年中酒池へ移り建
しとある明暦二年の景中酒池のよき出する
事やある處は是儘ある此板あり
志のよきと明暦四戌年 万治元年四月八日
法日記より山王法社永田多場酒池乃上へ
新き法建立舟為奉り板倉甚を布横
山内記友人に作付と云ふ亦万治二己亥四月

大正清史記曰舊高涉社地今のえ山王之高涉社
社既涉造管以來之付正遷宮之事之と云々
吾妻日記云明曆三年九月乃桑下之山乃
山王類火之付社既を溜池乃上松平之
殿氏忠房為受を之と云々之と云々
高涉社

○橋々井

井伊掃部殿墓の下より橋々井

石垣あり祖上御籠車三ツ並くあり大井戸あり

○妹々冥

けいなるより之と云々

城西

○平河天神社

糺町

別當長松山龍眼寺

神社略記曰社説ニ當社ハ人皇百四代後土御門天
皇文明十年六月廿五日太田道灌當國河越ヨリ御
城中平河ニ勸請シ奉ル其後慶長年中今ノ處
ニ移シ奉ル故ニ世ニ平河天神ト号スト云リト云云
江戸砂子ゆゑ世傳ゆゑ當社乃神祇ト云ハ本
骨の扇之也之是と云々小風と如し是と
必の之と云々之と云々

といはれ風と云くありかめりき近き堅固
の表事と云なりといふ

○貝塚 中野寺門外平河天祥の遺蹟名之

むうーはる山王の社あり

再板江戸砂子ゆゑ愛宕青松とけさなり

ー又とく甲斐塚むうー甲州の一里塚

ありー又甲斐塚と云く今もはる西表乃

内よりと云貝塚法下の塚なり其未曆ハ

洋ありと云松古の流と今のる切より南

ありと云大古なりーと今も西表敷くあり

貞旣と云く貝塚法下の塚々玉虫八左衛門殿の
西表内より云

○貝塚 ふー下甲目の方貝塚のありあり

南向茶活云貝塚と云く青松古の善地と云け
寺青松甲斐と云人草剣ありーはる南村玉虫
氏西表と云の流あり西表と云貝塚と云
今標に玉虫氏十手に塚ありと云貝塚と云

其上古言石碑有り年月と是を法号と
あり只平氏女と云ふ事あり是より中八幡
山あり今に在り

○元山王

松平右兵衛督殿御受賜通し井伊家御受賜し出るに
坂の上南の方十き塚子小社有り山王の四社在
る

○やまのすゐ

貞祐増補

横田井伊家御受下り坂あり井伊家の敷地あり

い葛川の南脇より涉坂の水際へ下る坂有り右水際
に石あり人曰方計に井の如く成る箱有り蓋を取
くと見ると井に在りす御く深き人計り有りて
水はす出る事いふる早魁ゆもく事あり
諸方より乞来らるる谷ありあり乃ちす出る事
ありて強く行進し水道有りて来る事あり
事も志進す基の冷水あり不思義の妙あり

○赤坂湯門

廿六と赤坂と云

赤坂造仕古々大沢の庄と云あり

谷をくまの事あり

○梨の木

井伊家為妻墓門の事云

は井伊家の中しき性古を如後肥後与清正第宅の
四地の一

貞雄云清正子息肥後与忠廣乃伐小坂所て新築

と一後寛永九壬申年七月十日尚不若喰遠取

而發共二少と井伊掃部頭在孝清領之井伊殿

其以まゝの上而發と常盤と一の内今の太

皇吾居殿殿而發あり

○玉川滝

江戸砂子云松平出羽守殿居發中と流の末と赤坂
の溜池に申くその水清く一とつても銀せと昔云
の池を諸善女と何と云一國無益枝と奥一と
いせ奥のりあると玉川の水と云る常と岩
石の内より流出赤坂田下の方より又見申る
と云と云

○清水谷

江戸麻子云尾陽公清敏と井伊掃部殿

の旨の坂と云ふは坂との不_レ同_レ一_レ 鯉ヶ_レ 坂
赤坂もは_レ 坂の丘小_レ 法_レ あり_レ 云_レ

○柳の井 法_レ あり_レ 坂下

里法_レ あり_レ 法_レ あり_レ 柳ヶ_レ け_レ 云_レ 西_レ 行_レ の_レ 方_レ あり_レ
け井と名付と云

○土橋 法_レ あり_レ 坂_レ 紀_レ 別_レ 中_レ 石_レ 交_レ 行_レ 法_レ 遠_レ 土_レ 子_レ の_レ 末_レ

○増上寺舊地 土_レ 子_レ の_レ 邊_レ 貝_レ 塚_レ の_レ 内

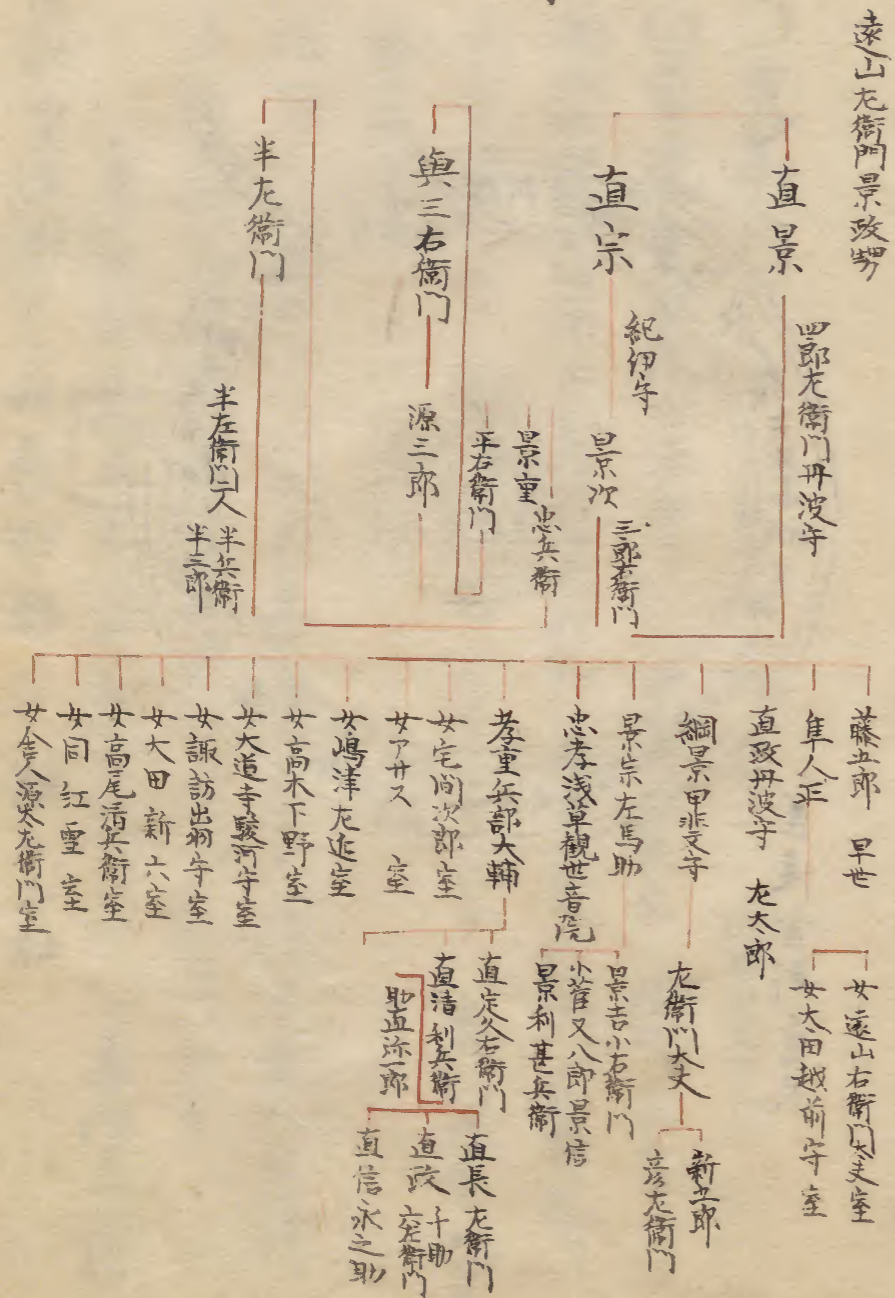
寺社拾遺と云は古々光明寺と云_レ 真言宗之正徳
二年し丑の暮け_レ 下_レ 住持_レ 聖_レ 論_レ 爰_レ 有_レ 法_レ 然_レ 上人

七世の孫才小石川信通院の巖山酒蓮社乃
譽聖上人立_レ たり_レ 法_レ 同_レ と_レ 守_レ 完_レ 示_レ と_レ 知_レ 山_レ 淨_レ
多_レ 小_レ 聖_レ 聽_レ 淺_レ 弟_レ の_レ 意_レ きて_レ 追_レ け_レ 同_レ 答_レ 一_レ 不_レ
譽_レ の_レ 答_レ に_レ 歸_レ 依_レ 一_レ 真_レ 玄_レ 宗_レ と_レ 捨_レ け_レ 淨_レ 土_レ 宗_レ
と_レ あり_レ 光_レ 明_レ 寺_レ と_レ 改_レ け_レ 増_レ 上_レ 寺_レ 号_レ 一_レ 不_レ 譽_レ 上_レ
人_レ 若_レ 才_レ 子_レ と_レ あり_レ 大_レ 蓮_レ 社_レ 酒_レ 譽_レ 聖_レ 聽_レ 上_レ 人_レ と_レ あり_レ
と_レ あり_レ

貞雄云是を今の芝小移_レ して_レ 末_レ 曆_レ 幸_レ 深_レ
合考_レ 子_レ 云_レ 一_レ 寺_レ 遷_レ 移_レ 家_レ に_レ 略_レ 也

今山王乃末社の禰為社小あり新口と
 東照宮園東涉入國以東江戸在城と一遠山
 丹波也東京より山王の社より平河に引し
 寺納と一新口之長く山王と涉入國の後内造管
 河て大社小ありし中今を以末社小掛ケし
 江戸乃社多身中よりけり子ら子銀と
 古袋と一遠山丹波也東京八州
 條家子屬一江戸の俣小居候し

略系



永田馬場山王末社

稻山何社三縣

鯨口之銘



差渡金刺壹尺

○巽谷御門

糺丁十丁目にり

以介四谷之

○常栄山天照院心法寺

浄土宗知恩末 糺町十丁町

閑山然公羽照山上人崇山大和尚 寺中貞松院 寂勝院

千手觀立音 閻浮檀金立像一寸八分 泰川勝守本言

地藏言

往古より尚寺の境内甚廣し一之源半若丸奥別
下向の時尚古く系流あり一里流小く

貞雄云尚古く市若の北壯の内へ尚附の流

小流也

○村高山長福寺栖岸院 浄土宗智恩末 同八丁目

寺傳に曰開山妙譽直入上人開基安友對する重信
性古之別より長福寺に云涉入國後

右令に依て改宗し尚不可移りし安友氏開基之
山内大防正親善 唐佛頼朝守本寺前立楠正成守本寺

徳寺正一位縮荷社

本寺阿派陀如來 惠心僧都作

○鎮護山善國寺 日蓮宗 池上末 同六丁目

開山佛乘院日惺上人 鎮守昆沙門天安置

慶長三戊戌年七月六日寂

按る小寺上古々馬喰町追廻る場乃西水の
例小寺寛文十庚辰二月朔日火災類焼く
け洲爰に移る再板戸砂多云尚寺の昆沙門
土中より出況靈驗の事志し由来の事略す

貞雄云予幼稚の時若くは日親日健支上
人の物語中々長若川久之節及の先祖父
子不和めて子息を糶下町宅にて居

らまゝに毘沙門にて信作を致毘沙門那利
はせんともぞう宛金子多くははるきり阿
多年のを格子窓より通うと詠く病もま
しよみそまをく 障りて空風強き日出家一
人あつたまきとけあ子を負て毘沙門め一
ませせも 未と一と幸の事よとらまゝに
あゝ叫入るまゝと彼出家中ととけ毘沙門
と加茂清正の具足櫓の本るめして靈験乃
る像之期くあゝといふとらまゝ何程も

賣り下り事ありけり家も毘沙門造立せん
と金子を支封く 持仏小入をまきり右の金
子もて中法一と中中とまきとと速く毘沙
門とまゝ一代金法を早急期てまきり右右
め出家のつとある會事とまきと彼は
さう内彼出家を帰り失せく文よは万志
まきととらんくすも授け煤をふいの法も成
りて掃除を致さるも持仏の内より彼の代
り減らるる金子と封のまき 出さるる一扱

と彼出家凡人小阿比次と主附也の如く
派信公は夜ある由禮あり父子の旨も和睦
阿比次家小立歸ら進出沙門とも長谷川友
房参入勅法阿比次より年と経く差志
阿比次若國支へ移す進出り、主差志と帝
久之帝及也若國古の現任と之由法も
國差とせんなりと云

○金子十郎家忠墳

江戸、麻子、云、糺、丁、元山王、越、後、寺、光、長、師、清、房、友

小内、阿、比、次、今、志、進、出、と、云、阿、比、次、糺、丁、元、山、王、越、後、寺、光、長、師、清、房、友
の、進、出、る、一、家、忠、の、墓、を、武、州、戸、田、坂、也、と、云、く、云、
阿、比、次、糺、丁、元、山、王、越、後、寺、光、長、師、清、房、友、此、家、忠、の、墓、を、糺、丁、元、山、王、越、後、寺、光、長、師、清、房、友、と、云、く、云、
阿、比、次、糺、丁、元、山、王、越、後、寺、光、長、師、清、房、友、と、云、く、云、

●松雄、阿、比、次、金子、氏、墳、と、阿、比、次、と、阿、比、次、の、人、と、云、事、を、
の、世、を、傳、へ、て、阿、比、次、補、丁、東、國、我、記、花、の、ま、と、多、賀、若、氏、家、
糺、下、妻、の、城、と、云、糸、下、十、原、正、元、乙、亥、年、多、賀、若、氏、家、
と、云、者、阿、比、次、常、陸、國、下、妻、御、上、城、を、糺、丁、元、山、王、越、後、寺、光、長、師、清、房、友、
阿、比、次、糺、丁、元、山、王、越、後、寺、光、長、師、清、房、友、と、云、く、云、
武、州、多、賀、若、の、御、上、城、と、云、く、同、九、卷、多、賀、若、の、家、傳、を、
桓、武、天、皇、正、統、平、姓、金、子、十、郎、多、賀、若、左、衛、門、尉、家、忠、と、云、
阿、比、次、の、阿、比、次、と、云、く、阿、比、次、と、云、く、阿、比、次、と、云、く、
川、尻、城、之、松、平、大、和、子、阿、比、次、と、云、く、云、

○番町

東西十六町

南北七八町

舊町芝名話云去菱町より六番町迄名所の事と云
元和寛永乃比大津菱流の扇賣といふ所ありて
うふ所河を渡地より六番町迄河より右に名所有
之儀表裏彩扇杯の類多く別進するといふ

○善国古谷

菱町二丁目善町に善国古谷の谷に

○鈴振谷下七云

○地獄谷

裏二番町と五番町の間の小谷と云

江戸砂子ゆゑ菱町三丁目の表より二菱町一丁目

と云ふに深りなる魚一 菱町三丁目裏と五番
町にけ糸の一本よりと云ふに近所にて多くを
是れをとり者又を成奴よりいづる者と云ふは
け若地獄の谷と世人忌む材栗梅等を生茂
りてきりとりて死に樹木若と云ふありハセといふ
○法眼坂 表二番町表六菱町に若と越の坂と云
け邊に宅間法眼といふ畫師にけふを名付
よといふ江戸砂子ゆゑ一と云ふに深りありといふ
け糸の一本と云ふ法眼法眼といふ人の扇賣け坂際と

河津右衛門守と云世説物語

梅多小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き

以美番町住乃事考く之と云き之と云き
一本ゆ云法眼法眼住と云説可き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き
之と云は小江戸砂子子代宅間法眼と云き

ふゆも是れと改し〜と後流し傳へ
〜宅るととと〜多ととと〜

○御厩谷

表六番丁の南裏通りと云

里流しと云む〜は通流厩所〜右の谷〜今も知
林勘右衛門及向安と流るの足流〜此流りて
其〜と云

○願正古谷

地獄谷の西隣長有川三而及水の包交下の通り

む〜けり〜東渡山取正古と〜澤去真宗の古なり
〜右の谷之けり今も京下川〜

○鍋割坂

表六番町堀河筋家〜布施家の間〜新九吉番町
〜坂あり

○切通之帯坂

表六番町が市ヶ谷口へ出る坂

○三年坂

南向茶話ゆ云市谷法門の先り〜六番町へ上る坂と云
寛永十三年涉郭出来の時〜不同なる坂三
年と名付る

○

貞雄云右の説より〜今本郷元町中
り茶王山三念寺と云〜け所より
今のこも木氏横が氏等のや〜三念寺の

舊地なるよりとすううううううの
谷よをりうとや

○行人坂

花やまの向の方

里淡より中法以坂の傍にけり一の法下と云ひ人
住居と一事を取小の坂と云一各を法下坂
ともいふ法下坂と深うう法眼坂と云者ある
法下我住居と移りまん事を忌まうけ坂より
怪物出杯流と云一事をとと

○花屋敷

表二敷町松田氏の中まきと云

表六敷丁表二
敷丁のるん

○蛙ヶ原

三番町

舊事若話と云ことん町少一の系にむう一池有りて
井の地と放と一う 名付るより一云傳ふ事と
も今のけりさぬめて是池有り(ま和ともいふと云
梅より地と放と一をけりううう河津成
の宅地有りて後より地と成りううう一

○四屋敷

耳底記云慶長の法吉田大膳に飛とりふ人の屋敷
ありと二ふ五百坪の形を法用地小うその道を

右田やまきと云し寛文年中山氏孫領あり
まほひのりくま山氏も勘録ありその時の事あり
よしと記す

揚子江戸砂子牛込清内中丁を非之糶
町之新屋敷八木氏の屋敷之家を右田屋敷
と云後山将監と云人の屋敷也あまり

城北

○世経稻荷 飯町坂中 神主 吉川式部

祭神 雅産霊 倉稻魂 保食神

略録記云尚社とけ地中蔭死の由未久〜
日中おと経る古流之は古耕作乃地あり〜
文安の法より山の腰に社を築め蔭古と次植麻
沼代河〜残まあし〜側と〜の東の流を江戸
川と云〜社乃とり畑野六千歩の地け官乃
境内あり〜右田屋敷に城草創乃初よりけ
と田安と云ハ尚社稻荷の林号と概と次〜
後 渉入國のわく〜と神木 檜の木を以て世経の
宮也 上三倉河〜よりけ号記す〜と云

○飯田町

未源雜記ゆえ性古と云代田村と云く田安子續一
田畑あり涉入國の所初く田安迎と涉装の所は不の
里民と云き世に其初と民家十七軒ありて
かゝるく田畑あり只飯田表と云者人
あり不の巨細とも中上をきと世に未け板の名
とあり一きと一舎と云は不と飯田丁と云
一と云

○飯田坂

むく飯田表と云者初く任者あり不の名とす
地名變四と云飯顯山イタヤ地名考云蛻岩詩朝望飯顯
山紫の一本と云正月十六日夜七月廿六日夜男女乃
俗月の出一同小竜燈のいをもと流とも甚群と
ありと云と云は今程志り

○柎積坂

飯田坂と云

け不と柎積坂と云事あり少くひあると云乃
本何と云一和の若くはと云ともたよと云
と云坂の傍に在今と木の若の志と云る唐め

と年ゆりたる等盤木つりよの同りはとち
の木とえまきつりけ樹先きの丙辰乃其ノ焼布
と物つひ枝葉とつりよとらん今を破姓
氏の屋敷の内小つりてその記彼の家記也
とらん

●今とちのま坂也唱るる旧名万年坂なり
老しり寛永氷中の地家を抄する中町家と今九
辰坂と唱ふ知れりもつりよの町家とのち中
辰坂の上と寛永氷のち辰坂と唱ふは
辰坂の上と寛永氷のち辰坂と唱ふは
辰坂の上と寛永氷のち辰坂と唱ふは

先小著す慶長年名版田某屋發せりと云
のに碑と傳へともあるや
江戸惣麻ふまのせりる某子屋の部と飯田下虎
屋柳屋壺屋つりよのち柳屋と唱ふ某子
屋今とあり茶屋屋を河邊と名の流り
そりよと彼つちやののまんと延宝年名
的也若祥古ゆく副司と勅しり言南和尙の
年とる不之記しりあめてよあよつちやと
言南和尙と同和申坂ある杉屋権左場つりよ
深物屋の先祖今権左場つりよ五代まゝある
権左場つち父なる今もその方めてそあるし
るふたつと思ふ世結あつりて地中位も曲亭子
の新志しりつりて好古の為と松疏り出補と

○柳の井

とちの木酒井家のやうに云

○錦の森

田中千守森と云ふ

二合半坂

とちの右坂の並ひ水の方

再板江戸砂子り

日光山と云ふ

○埴橋

飯田町北裏通の埴橋と云ふ

○まじり川

飯田川の北の埴橋のまじり川

○小川丁

むらとけの邊の埴村と云ふ田畑の地之後埴旗本流の屋敷の下なる畔と云ふ小治と云ふ

此助まうりて埴家の形を川と云ふ也世系の一本と云ふ也

貞雄云上代と云ふ埴村と云ふ也

埴入國の以後ハ高野道所といふ元禄六癸酉

年九月十二日埴日記云埴差相止の付

埴差町と云ふ埴坂町と云ふ也

通町と云ふ埴小川町と云ふ也

○大橋

埴川の邊に流竹本氏并氏十基間北の方

○大橋

埴川の邊に流竹本氏并氏十基間北の方

飯田川小くする九版坂の通し小くする橋之俵子是を
湛りて廻板と云々

○神田の側 又小川の傍あり 内蔵大和寺及び寺内より

○護持院舊地 神田橋の橋の外芝圃に

此所を新弱の系と云々一江戸砂子に足申或人のいふ
は系より一復系二復系乃左列のり云々

貞祐より一復系神田橋の橋の石の大系に

天和貞享の法近き小局交り元禄元年

に寺地と云々 是院小くするその後

是院寺号と 台命と云々 護持院少

改心享保二年酉正月廿二日乃大火に焼亡

く護持院を大塚の喜柳丁に移すは

その以来長く此地と云々

二番系と一番系の西の方の系に貞享の法ハ土

屋甲斐寺殿三浦を改ち殿中へ移りてと云

は云々是元禄二年申より此地と云々

明和年中松平采女西へ移りて又明和

九年辰二月廿九日の大火に類焼つりし後

明化とある家

二枚系と二枚系の西の系は天和の法止と
酒井伊豫守及松平備前守及中ノノノノ貞
享の法より明化とはある
一枚系の東の方より一の宣化より天和年中
中山勘十郎中加茂伊織左衛門守彼守等の面交
是も元禄の法よりある

○小栗坂

小栗坂のありふたの坂といふ
は処小栗坂通小栗家の面交より一右ノ右ノ

○三ヶ所稲荷社

小川下水道橋西去々林主 智淡路守平為隆

祭礼之座 倉稻魂言 大上命 大市姫命

尚社縁記云小川町と姓古武彦小豊信弱三ヶ村
とて田畑草野あり一村乃惣信弱之寛永年中
武士地より後り三ヶ村とて元禄通町とて
之後元禄七年戊午小川町と改る尚社を今の
社地より二十石程辰巳ノ浦に戊亥向の社あり
と縁記ありしとあり寛永十三年神田川通り
堀割溝に傳隆奥守經宗胡臣 在命を奉りあり

命と相殿ふ多る享保十八年癸丑九月より
 往古のしく神号を金山彦官と号すと
 末社尾落大明神寛永四年丁卯四月十三日夜白
 狐尾と和田兵部初らひ得て尚社と劫法を男
 女腰より下の宿ひと作る事後年の後鹿枝
 柄抄とを納と
 末社白狐社
 天正十九辛卯年五月廿日社中より赤洞の狐と堀
 出と祀之和田藏部乞と多る

末社疱瘡神社 系神氷室神末社牛頭天王 同素戔鳴命
 尚社小七夜待せし事つゆ曆二丙申年二月十七日
 夜夕同女三首近り胡と大日如素と洋し一夜八月談
 事と洋とより神とより或人の説ふ是と縁根稻
 荷とより尚社の前を珍禊者子杯と通し其水
 前を通すと必離別と云ふことと通し世説信
 し疑し多ん世神伝子左板乃不堂とつ之と云
 との事んや

○水道橋

世橋を並ひく上水の古樋を承上橋の谷とす

江戸砂子母むうと比川上江戸川の流き飯田町
の下と流きるとと比川の各流入地あり
今にり万治年中松平陸奥と反約今と好く
涉茶乃あそ堀り浅茶川へ流き是と神田川
と云又けりと吉祥ありとも云

貞雄云上右吉祥を今の小川町松平紀伊吉
屋交の追ふりしと涉入國城あり橋の外
今の石川家松平家石丸家等乃不子移
て是明暦三年乃大火追けり

と彼大火子焼亡乃後約は移さる如し
明暦年中追ふりし第一橋中へ子吉祥
ありと云し寛文の未追も吉祥あり
と云しと延宝乃初めの流り水道
ありと云し事左繪宗と明白

○小石川涉門 江戸の介より小石川
或人の云くは涉りて永楽涉りて云く昔は橋造り
く永楽後門習ひありて云く
貞雄云は流りては涉りての出来せり

明曆以来の事之を後に述べて、永楽後、
警の事と古書に見る事

○袖摺橋

松平渡利侯の屋敷の南へ下水の石橋を云

相傳云、佐古と市谷長田寺の池より牛込河内乃
通より、飯田町堀邊の堀小つとさくあり、
志々くと井田川堀より、のり堀と堀きく、飯田丁
より止む所の河小つと一橋とさく

○牛込河内

新元、隨筆ゆえ昔と牛込乃熱、河内堀きく、四麦丁

く長坂血港より、及須田久左衛門より、さく川の
浦と、数町方より、牛込方と、小栗半右衛門及、同美七
市書、及、新堀、又、右衛門、及、さく川の、さく川、牛込方より、
中より、さく川の、乃、さく川、乃、さく川、乃、さく川、乃、
のり、さく川、乃、さく川、乃、さく川、乃、さく川、乃、
河内、市、乃、河内、乃、河内、乃、河内、乃、河内、乃、

城良

○三河町

佐々新田系と云ふ事、佐々新田系と云ふ事

天正十八年、河内入國の後、さく川の、乃、町人、小初、て、け、地、を

まふこ

○涉庵稻荷社 三石丁

○神田塔 深倉の塔より遠丁へ塔はく天和年中

貞雄云今の神田塔の石は明暦大災後大消
し多め小古石と築りま松並木も植りま

天和年中余りて今の塔ふりせらま

○竜閑橋 神田塔より遠丁へ塔はく天和年中

○焼々井 聖大工町

江戸砂子後篇ゆえ清永屋敷の井なり始め

老女地と不持せりは井石ありありは清用金
妻とやる

○今川橋 通丁白根丁の橋より

天和の法始りて橋とまはるまは法の谷を今川若
右衛門といふ故まの石とて江戸砂子より出

○主水々井 白根町より

大久保よりやまの内にまむる冷ありあり

○藍染川 町より紺屋丁へ流る

まはる染川とも云ま下流上より南水のあり

友の各々ともまゝ、井屋町の裏通り右の縁小
よりくの各ありとも云う一江戸砂子ゆこゆ

○頬焼茶師 うち丁 真言 養善院

子葉女常胤結女古佛うけ方燈りゆえ一也
江戸砂子小出也

○恵心北須乃井 うち丁二月北東の角

葉の一本小云むうけ井と堀り一付去ゆて作
り一五以須の像をとり出さるるより右付上

○お玉の池 本名橋の池 井屋下の上

往古お遠性兼乃乃心助也 池橋の池乃傍り兼
池ありともおしほせり一お女は 猿人きとお玉
の葉屋せりゆはひく お玉の池也云一
之亦説あり女と云女は池より身をさけ死すそ
霊也云とあり一おけ物屋表也云結く荒
地あり一今と町家おなる 年流ぬるを
うさし一山家りもあむうと大池あり
うはく埋り一お瓶のくさまり池の端に柳
有り 傍りお玉の池の柳と云一本の下に

小キ宮有りおむとある也云り又此地と云ふ
めの池也いふとそ是を直に馬丁の藍深川小
對しての里流ありと江戸砂子に出
著實異事に享保の初め浄大工棟梁米系孫
兵衛といふ者け愈をそと洋領一住宅此
りて、喜原小柳の亦いふ是系妖怪伝也云
りたり享保十四年二月下女を汲小出の時怪
異の事ありて下女氣絶する事あり孫兵衛是
と傳へ池と柳の在る小と事ありとて池

と記め柳と切、同年六月孫兵衛男子早産、其
翌年正月孫兵衛死す、是とて事と云ふ
少流ありと云ふ事あり

○無蔓橋 新海通橋

或説云橋とて今も此處にあり小長刀の形
小似るあり若くともりふ又むけは如大髪結
麻子無蔓の画本にありといふ事あり無蔓橋
と云ふ

江戸砂子由云此助遠小海とてむつりき橋之棟

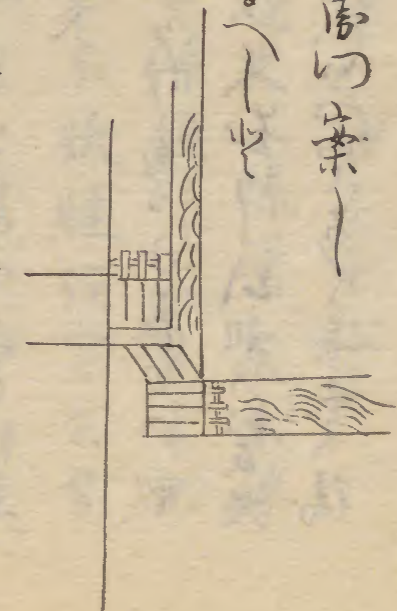
梁舟其小左衛門地割の橋なるを名付る

貞雄云川出助むつりて橋を名

二更に強しと舟其小左衛門業

出し掛しりの名ある

蛭川親豊の活



○新封疆 詳至下海端通明和四年集之也再板江戸砂又由ス

○神田廣小洛 享保の始シ

○元哲言願古前

浅草藝能寺は徳川少将の明曆年中浅草寺に移す

貞雄云藝能寺は上右相別小由尔と

丸下に移すは後柳系に移す

○赤山

市橋家守は乃未申の隅に五間小拾間計の

之むの形罪場あり

○新橋 下り

○和泉橋 助達

後堂和泉寺及

系とよ水と向柳系と云

○助遠橋

津田橋より云

津田見付と云

○昌平橋

始と羊洗より云

元禄乃江戸系とは相生橋より一帯堂口建
立の後中曾の昌平御の因ありて名付

○相合橋

江戸砂子云助遠より内小町一隅田町乃横丁
乃小橋乃より之尾家也町家也中分宛之
左ふと云云

○亀ヶ井

連雀町

令田園防ち友家十の内の内よりむり一々由茶の水
中ありてありひるき名水ありと云

○雁淵

柳系去々下迄と云

むり一浅草松壽院世ありと云

○柳系封櫃

助遠橋より浅草より一法々介ハ津田川之

むり一柳ありと云一と享保の法成の法柳系と
ソレを柳を植庭より一古今ありて植庭より
今々大木とありて中國の人の云豊前国柳

浦之三里、櫻と皆柳、之介他國ゆり此地不
とほき者、柳系と云ふと、松茨、一、予、物、洪
と、事、始、り

○柳森稻荷社

柳系古下

別當

仁王院

神社略記曰社説云尚社と其系始く不祥
と能中の世下の世世敷の中少少の祠ゆ
徳元河り、と元禄八年始く建立り、と云
按、この尚社の徳元、元年曆と云ふ、と
と、事、始、り、と、む、り、と、柳、の、森、也、と、性、古、也、也

と柳多く、河り、と、不、也、と、云、多、り、柳、系
の、名、も、傳、り、と、柳、の、魚、と、云、の、後、柳、と、松
と、名、の、と、河、り、と、事、保、の、比、も、と、松、と、建、し
る、と、ん

○駿河巻

一説は、多、と、云、又、四、五、に、名、り、と、里、説、云、り

紫の一本ゆ、杯、駿、河、巻、と、り、と、云、を、神、田、巻、と
り、と、駿、河、巻、下、小、在、伝、の、流、中、に、下、へ、古、出、と、建、
け、其、巻、と、云、と、下、と、建、と、云、り、と、駿、河、巻、也、
と、云、と、云、け、此、の、古、巻、の、説、小、む、り、と、駿、河、巻、相、公

涉屋交りしを後に巻少く入りて此あり
多うりしと云又或説は辺むりし芝津村也
りし

按はる小江戸妙子也云涉入國の初後河在
巻元と名出さきは初より屋交と入りし後河
巻也云りしと伝は是大有誤有る也一由
入國の初後河城へ涉渡本 在後河一筆書
るに録も是と傳は傳へたるは案の一本
也此所を江戸妙子に足傳るる云る

案の一本は涉入國のこまうりし

貞雄云涉入國の初と駿河の山々表在云一
せらまうりし中村武敏が捕一也小ありし
さし一在番城はありしと又云後河涉城
下に在伝の流江戸へ下て巻交と記す一筆を
表交りし一は元和二年四月十七日

神祖後府小於く涉他界の初由附の流中
江戸へ下て巻交と記す一は二ハ後河
大綱云忠長公寛永九年十二月上野國に涉

山形流の節四附の流石面を社下一（事あり）
山支の内の事あり

○皂角坂

サウカチ

水たまりの流石面（のあり坂）

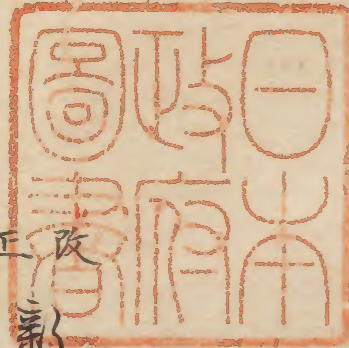
むうーさふー多くある坂の石と此は今と
比を本ありとあり

○太田稚拙荷社

後河巻古子 利當松竜山安重院

縁起云尚社の字像を小野管公兼平中源俊國
一配流の時海中翁の形と記し、是を洛陽東
寺右面稚の社なり、厄瘡を救ふ人と流し、海中

入忠刻管を社像と彫刻し、其像を山城山形
里に傳はす其後太田指資長祿二年戊寅尚城
子安重一より勸る後、法入國の節に於て遷在
り、今この昌平橋を社古といふ橋也、
此の社若林兼次を祀り、社を信し、孫の厄
瘡を祈り、靈夢を著し、厄瘡の類を救ひ、
其事の知る如く、安元元年子九月若林家より
尚社建立あり、世に厄瘡といふや、いふも一
里より



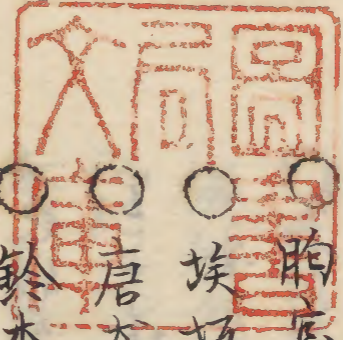
正改

編江戸志卷之一 終



○親音坂

此坂の意ハむす芽浦親音古の字ナリ
ハシ左名付クニ



○胸突坂
○埃坂
○唐大坂
○鈴木町

小河町より後河巻右の方ノ上り坂ニ
火消中ノ方ノ登坂ニ本名光蔵古坂
ニリ池田市ニ並友尾登康大ノ所ノ名ニ
鈴木町ノ人多ク存存鈴木正三ノ遺跡ト云フ有リ

○淡路坂
昌平橋の方より後河巻ノ登り坂ニ
○甲斐坂
袋町より上り坂ニ
性古多揚昌字より少沙医師の屋敷より一石
多しむす子世伝是と甲斐坂也云々一石中
滑り

